



海外移住資料館

Japanese Overseas Migration Museum

展示案内

われら 新世界に参加す



独立行政法人 国際協力機構
横浜国際センター



海外移住資料館

Japanese Overseas Migration Museum

展示案内

われら 新世界に参加す





中南米に生息するモルフォ蝶。この青い蝶々には、清新で自由な精神で飛翔する移住者のイメージが重なり、資料館では、われわれをいろいろな移住地にいざなうナビゲーターの役割を果たしています。

表紙写真

横浜移住斡旋所

海外移住の歴史コーナー
展示風景

書生コーナー
展示風景

最後の移民船
“にっぽん丸”

川瀬家の
携行品

はじめに

日本人の海外移住の歴史は、1866（慶応2）年、江戸幕府が海外渡航禁止令を廃止した時にはじまり、すでに100年以上の年月を重ねてきました。現在海外で生活する移住者とその子孫の日系人の数は250万人となっています。遠く海を渡った多くの日本人は、生まれ育った日本とはまったく異なる社会や文化の背景を持つ人々とともに、移住先国で新たな社会と文明づくりに参加し、よき市民として確固たる地位を築き、地域の社会、経済、文化の発展に大きく貢献してきました。

当資料館では海外移住者を、新天地で新たな文明形成に参画したいわば「国際協力の先駆者」ととらえ、資料、文献、写真等の展示をとおして彼らの歩んだ道を日本人の歴史の中に正しく位置づけることをめざしています。

戦後、主に中南米への移住事業を担ってきたJICAは、移住者たちの足跡や役割について多くの人々に伝え、理解を深めてもらいとくに若い世代の人々に地球市民として、一人ひとりが移住者からのメッセージを受け止めていただきたいとの思いから、中南米とハワイを含む北米を主たる対象としてこの海外移住資料館をJICA 横浜に併設しました。

「われら新世界に参加す」を基本テーマとして2002年10月に開館した当資料館は、今後とも、多くの人々が海外移住者と体験を共有できる場所として、また世界中で活躍している移住者やその子弟にとっては、心のよりどころとして親しんでいただくことを目指して参ります。

最後になりましたが、今日に至るまで各種ご尽力を賜りました内外の関係者、関係機関・団体に、あらためて心よりお礼申し上げます。

2004年3月

海外移住資料館長

【凡例】

1. 本書は、2002年10月に開館したJICA横浜海外移住資料館の常設展示を、その構成に沿って解説し、主要な展示資料を写真等で紹介する「展示案内」である。
2. 解説文、年表は基本的に展示場における解説パネルおよび年表を再掲しているが、一部加筆、削除した部分もある。
3. 表記は、平易な日本語を用い、漢字は新字体としたが、歴史部分の記述における固有名詞等については一部この限りではなく、難解な語句にはルビを付すこととした。
4. 外国の国名、地名は外務省の現行表記法によっている。
5. 年代の表記は、導入展示および海外移住の歴史部分では西暦と元号を併記し、その他においては原則として西暦を使用した。
6. 解説文の執筆は、巻末に記した展示監修者、資料館の関係研究員がおこない、各稿の文末に執筆者名を記した。
7. 海外からの寄稿を6篇掲載した。ポルトガル語、英語で提出されたものは資料館において日本語に抄訳した。
8. 資料・写真・アーカイヴ類の本書への使用に際し必要なものについては著作権処理の手続きをおこない、巻末に著作権所有者・機関等一覧表として掲載した。
9. 資料館設立準備段階からの資料、情報その他各種協力の提供者・機関・団体名一覧は、極めて多数におよぶため本書には掲載しないが、展示場に設置したファイルによって確認していただきたい。
10. 本書の編集は海外移住資料館においておこなった。

展示のねらい

海外移住資料館
前学術委員長
阪田 安雄

近年、とくにこの十年来、日本人の海外出稼ぎや移住について、いろいろな書物が出版されるようになり、テレビの特別プログラムなどでも取り上げられるようになった。その結果、より多くの人たちが「アメリカ合衆国に渡った日本移民の足跡」、「北アメリカにおける太平洋戦争中の日系人強制退去と収容」、あるいは「ブラジルの日系人」などについて考えをあらたにしたり、関心を深めるようになったと考えられる。しかし、日本人の海外移住や海外に暮らす「日系人」と呼ばれる人たちについては、まだ研究されていない課題、出来事、あるいは事柄が数多く残されているのが実状である。そのため、残念なことに、誤った歴史上の解釈や見方が事実として信じられていることも多い。

大学における社会科学系の授業で、受講する学生一人ひとりに、まず自己の研究調査の対象として、ある特定の課題を探し出すよう求めることがある。それは、それぞれの学生が選んだ課題について、いろいろな観点から質問を繰り返し、その過程で、最初曖昧模瑚としていた研究課題をさらに具体的なものに煮詰めることができるだけでなく、それまで受け入れられていた「定説」あるいは「通説」を、検討し直すことが重要と考えられるからでもある。それは、自分自身の考えや関心をさらに意義あるものに深めていくことにも役立つ。

この資料館の展示で取り扱える題材は限られている。また、この資料館を訪れる人たちの中には、日本人の海外移住の歴史や海外に暮らす日系人の生活や体験について、すでに豊富な知識や考えをもっている人もおられよう。そのような人たちを含め、来館者が展示を見ながら、新たな疑問をいだき、考えをあらためることにより、これまでとは異なった知識をえたり、新しい発見をするようになることが、この展示の大切な目的の一つである。事実、展示の構成もそのような過程をうながすような内容となっている。

来館者の展示場におけるそれぞれの体験が、日本人の海外移住や日系人に関する関心を高め、知識を深めるきっかけになることが、われわれ関係者の希望である。

本書がその一助として活用されることを切に願っている。

海外移住資料館 展示案内

Japanese Overseas Migration Museum

目次

はじめに	
展示のねらい	
展示場平面図	
導入展示	
ローズ・フェスティバルの野菜山車 ^{ベジタブルフロート}	8
第I章 海外移住の歴史.....	9
世界移住マップ	
移住者統計	
時代区分	
I期 海外渡航のはじまり	
II期 海外出稼ぎのはじまり	
III期 定住移民(移植民)のはじまり	
IV期 海外移住の中断	
V期 戦後移住のはじまり	
年表	
第II章 われら新世界に参加す.....	33
日本人海外移住の文明史的意義	
移住の背景—なぜ海外へ行ったのか	
移住の道のり—どうやって行ったのか	
移住先の風景—どんなところへ行ったのか	
移住者のなりわい—どんな仕事についたのか	
移住者の家庭—どんな暮らしをしたのか	
移住者のきずな—どのようなコミュニティをつくったのか	
移住者たちの語る移住体験—証言映像より—	
第III章 ニッケイ・ライフ・ヒストリー.....	55
第IV章 日本の中のニッケイ・世界の中のニッケイ.....	58
第V賞 デジタル移住スペース.....	62
第VI章 海外移住資料館へのメッセージ.....	65
第VII章 来館者ノートから.....	69
掲載資料等の著作権所有者・機関一覧.....	71
利用案内.....	72
交通案内.....	73



アルゼンチンで活躍した
日本製の耕運機



日系人家庭で
使われていた戸棚



ハワイの火山岩で
作られた石臼



ペルーで愛用
された蓄音機



ブラジルの移住地
をめぐった映写機

展示場平面図



大型三面マルチ映像
「新世界の風景」



「ぶらじる丸」(二代目)の模型



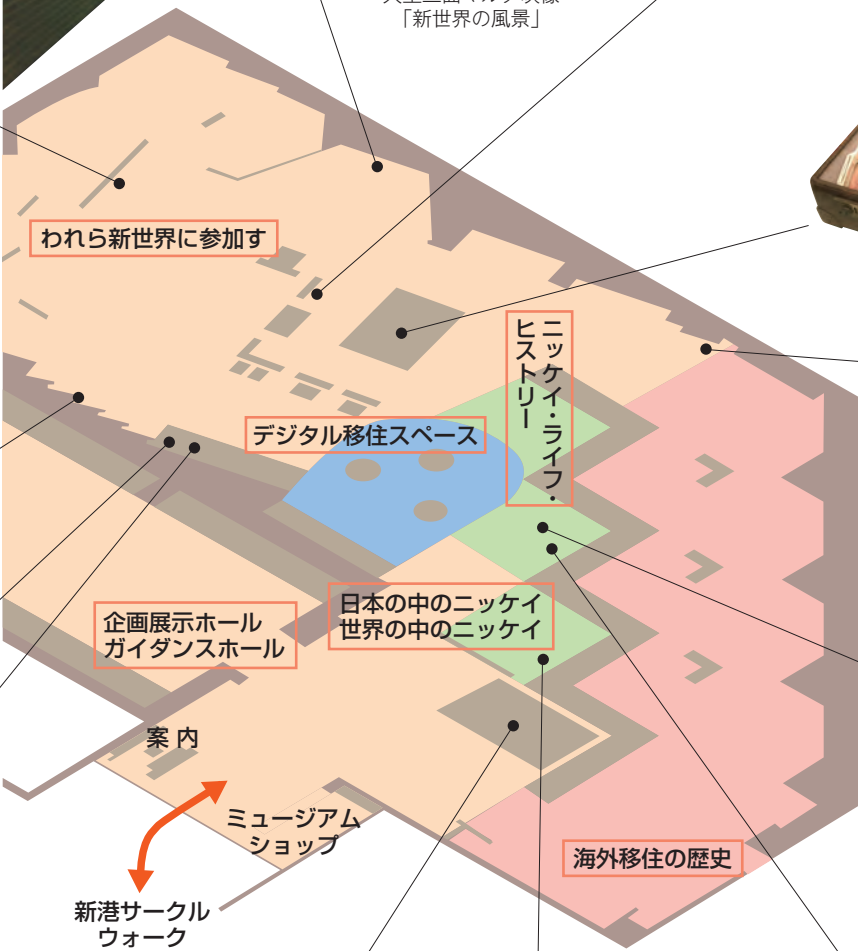
さまざまな携行品



渡航に持参した
茶箱とスーツケース



ブラジルで使用
されていた写真機



ローズ・フェスティバルの野菜山車



カナダのワイン樽で
作られた太鼓



「家族のきずな」六世が誕生したハワイのビッグ・ファミリー

ローズ・フェスティバルの野菜山車^{ベジタブルフロート}

おいしい野菜や果物の栽培、出品した山車は「ローズ祭」で一等賞^{フロント}

アメリカ合衆国オレゴン州ポートランド市近郊で農業を営む日本人農家が、1920（大正9）年、同市のローズ・フェスティバルに、自分たちが栽培した根菜、野菜、果物などを使って山車を作成して参加し、「産業」B（動力車で牽引）部門で一等賞を授与された。展示されているのは山車の後半部のレプリカで、前半部には子豚2匹が入っている籠が置かれていた。何軒かの日本人農家が養豚業を営んでいたことがわかる。このパレードに参加したポートランド市近郊の日本人農家だけではなく、南北アメリカに渡った日本人のなかには、都市近郊で蔬菜や苺などを栽培した人たちがおり、都市の住民の需要の大部分をみたくようになっていた。一軒の農家が所有する農地の面積は小さかったが、家族全員が精出す集約的農業は、品質が優れた商品を早く市場に出荷させ、都市の消費者を喜ばせることができた。日系人史研究者たちは、アメリカにおける日本人移住者の農業の分野における貢献を、高く評価している。（阪田 安雄）



2. ビデオ映像の一画面 模型のもとになった



1. ローズ・フェスティバルの野菜山車 縮小複製
当時の映像・写真資料と現地での聞き取り調査をもとに再現。
屋根の一方がアメリカ国旗を模しているため反対側の屋根には日本国旗があったと推定される

第 I 章

海外移住の歴史



第 I 章 海外移住の歴史

世界移住マップ

人類の歴史は移住の歴史でもある。人類誕生以来、人々は故郷を離れ新天地を求めて移動し、幸福の地を見つけては定住した。この営みの繰り返しによって人類は地球全体に拡散する。拡散した地球上の各地に社会と文化が築かれ、新しい文明がうまれる。日本人の海外移住も人類の移動の一翼を担う。自由で勤勉な精神を高い技術が支えて、多くの日本人が世界の人々と共に人類の移動の歴史に参加したのである。

世界移住マップ(Migration Geographic System)は、GIS (Geographic Information System、地理情報システム) 上に、歴史・地理・社会・政治・文化等に関するマルチメディア・データを重ね合わせて、人類の移住の歴史と移住による文明の構築をダイナミックに表現する情報表現システムである。世界移住マップを構成する各ステージは、人類の移動から日本列島の形成、地中海やアラビアでの移動、アメリカの奴隷貿易、産業革命と奴隷解放、戦前の日本の人口移動、戦後移住、技術移住から未来の移住へと続く。世界移住マップを通じて、約 700 万年といわれる人類移動の歴史を地理的な広がりとともに理解し、その上に築かれた社会や政治制度などの人類の不可視な営みを可視的に実感することで、移住の意義を考える一助となることを期待する。

(山本 匡・福田 直毅)



4. 世界移住マップの一画面

◆情報展示としてのシステム解説

世界移住マップの画像はプロジェクタから直接に壁面に投影されている。本システムでは、時間軸に沿って移住に関する情報表現が展開するオートモードと、非接触型三次元操作系を用いて来館者が各時間ステージを任意に選択できるマニュアルモードの、ふた通りの操作モードが実装された。三次元操作装置では、青いモルフォ蝶と地球が人類の移住と自由な精神のシンボルとして浮かび上がる。この立体イメージに手をかざすことで7つのステージの選択を行う。各ステージでは、CG 動画、資料写真、解説が次々と世界地図上に展開する。

(山本 匡・福田 直毅)



5. 世界移住マップコーナー空間プロジェクタ
空間プロジェクタの前に立つと地球とモルフォ蝶の画像が空中に浮かんで見える



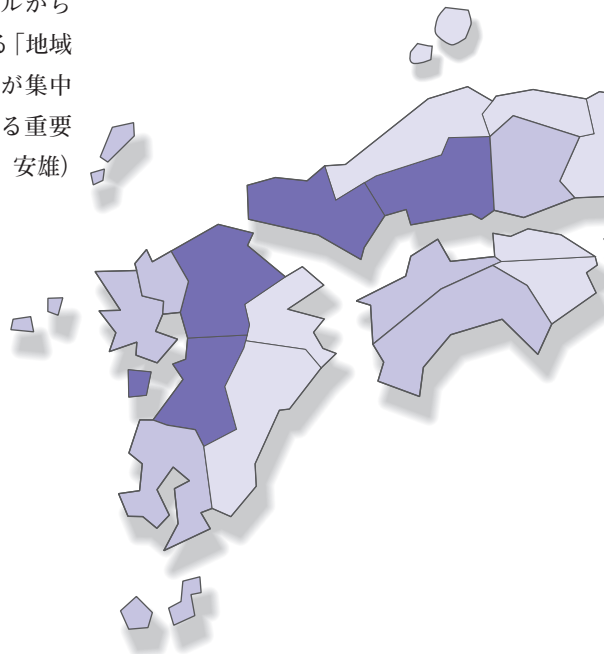
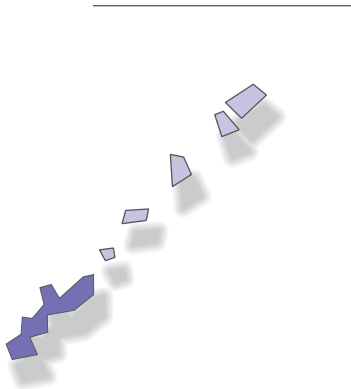
6. 世界移住マップコーナー展示風景
手前の3台の空間プロジェクタで操作を行い、選択された情報コンテンツが壁面に投影される

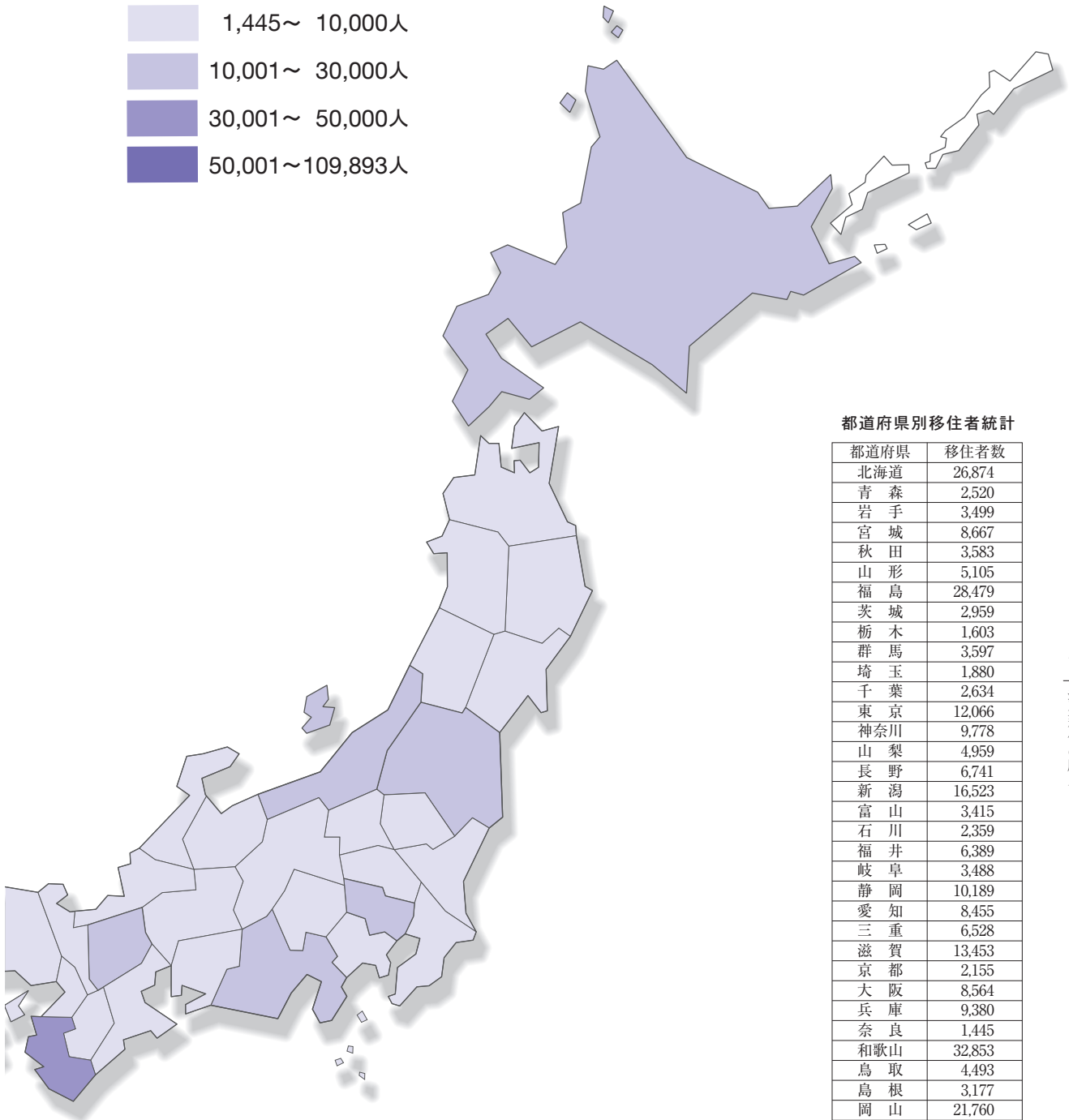
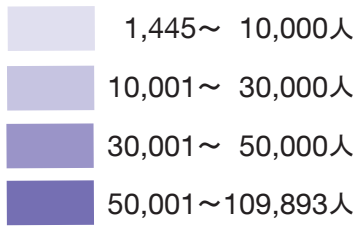
移住者統計

「移民の国」として知られているアメリカ合衆国では、いわゆる「移民統計 (Immigration Statistics)」は、1819 年以降、連邦政府機関 (国務省、連邦統計局、移民局) へ報告された合衆国へ渡航し入国した外国人の実数が基本となって集計されたものである。一方、日本から海外諸国へ渡航あるいは移住した日本人に関しては、出国地、すなわち戦前では横浜、神戸、あるいは長崎などの港における出国者の調査・報告は行われていない。日本における「移住者統計」の基本となっているのは、日本からの海外渡航ならびに移住が始まった 1866 (慶応 2) 年以降、幕府および日本政府の取り締まりの基本となっていた「旅券制度」に基づき、外務省が集計した「海外旅券発行者数」である。

ここに示されている統計は、『大日本帝国統計年鑑』ならびに『府県別統計年鑑』に報告されている「海外渡航者数」から集計されたものであるが、その基本となっているのは外務省の「海外旅券発行者数」である。したがって、日本における「移住者統計」から海外へ移住した日本人の正確な実数は知り得ない。旅券の発行を申請しその交付を受けた人すべてが日本を出国したとは判断されないし、また旅券規則によれば一時帰国し、長期日本に滞在した「移住者」は、移住地へ帰る (再渡航) 際には、新しい旅券の交付を申請しなければならないことになっているため、移住者統計にはそのような移住者の数が重複して記録されることになる。

日本の移住者統計は完全なものではないが、この展示パネルから分かるように、日本からの海外移住の一つの特徴となっている「地域性」、すなわち「移民県」と呼び称されている県に海外移住者が集中していること、などの海外移住の傾向や趨勢を検討、考察する重要な手がかりとなる大切な資料となっている。 (阪田 安雄)





都道府県別移住者統計

都道府県	移住者数
北海道	26,874
青森	2,520
岩手	3,499
宮城	8,667
秋田	3,583
山形	5,105
福島	28,479
茨城	2,959
栃木	1,603
群馬	3,597
埼玉	1,880
千葉	2,634
東京	12,066
神奈川	9,778
山梨	4,959
長野	6,741
新潟	16,523
富山	3,415
石川	2,359
福井	6,389
岐阜	3,488
静岡	10,189
愛知	8,455
三重	6,528
滋賀	13,453
京都	2,155
大阪	8,564
兵庫	9,380
奈良	1,445
和歌山	32,853
鳥取	4,493
島根	3,177
岡山	21,760
広島	109,893
山口	57,837
徳島	1,869
香川	4,885
愛媛	10,496
高知	11,732
福岡	57,684
佐賀	10,473
長崎	23,129
熊本	76,802
大分	4,533
宮崎	3,544
鹿児島	16,597
沖縄	89,424

このデータは、1885年から1894年、1899年から1972年の間における都道府県別出移民数をまとめたものである。前者は、阪田安雄氏、後者は石川友紀氏の研究成果に基づいている。

時代区分

歴史を語る場合まず第一に考察しなければならないのは、その歴史の舞台となっている時代の背景と、その時代における歴史の流れをどのように把握し、対象となる時代をどのような基準に基づき、分析・論考しやすい部分に区切るかということである。そのような区分の仕方は、歴史を書く人の判断—客観的あるいは主観的—に基づくことが多く、歴史の流れに大きな変化をもたらした画期的な事件や出来事、たとえば明治維新あるいは日露戦争の勃発、を重視する時代区分は、客観的な判断に基づくものの例として挙げられよう。その一方、北アメリカへ渡航しその地に滞在した「移住者」である一世が書き残した多くの「在米日本人史」に見られる時代区分は、一世自身の視野の狭い、限られた実体験、あるいは判断や見解を取り入れているものが多い。「出稼時代」と「定着時代」、あるいは「書生、水夫密航時代」、「移民会社時代」、「自由移民時代」などの時代区分が、それらの例と見なされよう。そのような時代区分では、歴史的事実より移住社会のロマンや希望的な展望が、移住者の語り継ぎたい「歴史物語」の筋書きとなっていることが多い。

海外移住資料館の歴史展示の時代区分では、総合的な移住の歴史的研究で重視されなければならない、国際的な時代背景—たとえば日米両国の歴史の流れを重視した客観的な判断—に基づくものとなっており、5つに区分されたそれぞれの時期では、個々の区分を特徴づける一連の歴史的事件や推移ではなく、始まりとなった歴史的事態、出来事を象徴として強調している。またこの時代区分では、北米や南米という地域的な違いより、日本人の海外移住を総合的に捉え、幕末から明治にかけてのまだ発展途上国としての日本からの海外移住と、日露戦争以降、日本国民がアジアの列国、さらに「先進工業国」としての自覚を高めていく「日本帝国」からの海外移住の流れ、さらに戦後の「敗戦国」としての日本からの海外移住を、歴史的持続性を重視する一つの流れとして考察しようとしている。

(阪田 安雄)



7. 海外移住の歴史コーナー展示風景

I 期 海外渡航のはじまり

向後御免之印章可相渡候

1866 (慶応2) 年4月9日 (旧暦)、徳川幕府は、「海外諸国へ学科^{あいち}修業または商業のため相越したき志願の者」に「御免の印章」を下付する旨通告した。維新の新政府が誕生する2年前のことであった。後世から見れば、幕府の開国政策を批判する人が多かった幕末にこのような措置を実施したことは、英断と見なされるかもしれない。事実、この措置の施行は、幕府が1639 (寛永16) 年以降2世紀余にわたり「鎖国令」により厳禁していた日本人の海外渡航をやっと許すようになったことを意味していた。だが、これは幕府が自己の意志で実行したのではなく、「安政通商条約 [不平等条約]」締結国の意向を尊重した措置であった。そのため、海外渡航が許されるようになって、日本人がこぞって海外に出かけることにはならなかった。残念なことに、「幕府の英断」を歓迎したのは日本人自身ではなく、不平等条約の「治外法権」条項に保護されていた開港場に居留する外国人で、彼らは、隣国の「清国」同様、日本の開港場においても日本人労働者を安易に雇用でき、雇い入れた人たちを自由に海外へ連れ出せるようになることを待ち望んでいた。結果、「元年者」のハワイ渡航や契約労働者のグアム島への送出のような不測の事態が生じている。1868 (慶応4) 年に新政権を樹立した維新の指導者たちは、外国人に雇われる日本人労働者の海外への集団渡航を、清国開港場における「苦力貿易」の例もあることを慮り、明治初年の混乱期にはできるだけ阻止しようと努力した。そのような明治政府の意向を反映し、945人余の契約労働者が「官約移民」としてハワイ王国へ渡航し始めた1885 (明治18) 年1月以前に海外へ赴いたのは、主に留学生、貿易商人、それに外国人に雇われた少人数の使用人や芸人であった。(阪田 安雄)



9. 御免の印章 1867年 複製
幕末から明治にかけて発行されたパスポートの名称。1869年から「免状」と呼ばれるようになり、1876年から「旅券」が正式名称となった



8. 日米修好通商条約 複製
1858 (安政5) 年6月19日に江戸で調印された。幕府が安政5年米英仏蘭露の5か国と調印した「不平等条約」の一つ

Ⅱ期 海外出稼ぎのはじまり

出稼ぎ延長と高まる排日感情

日本人労働者が最初に集団で海外に赴いたのは、ハワイと北アメリカの西海岸であった。そして、これら労働者の海外出稼ぎがはじまる前、1883年頃から「書生」が個人として渡米し、驚異的な産業発展を遂げている「金ぴか時代」の合衆国で新しい知識や技術を学び取るため、合衆国西海岸のサンフランシスコ オークランド桑港や王府などに居住し活動しはじめていた。書生と出稼ぎ労働者は、ほとんどが若い独身男性であり、ハワイあるいは北アメリカにおいて一時滞在を意図していた。書生はアメリカで得た知識や技能を持って帰国し日本で立身出世することを夢見ており、労働者は出稼地で稼ぎ貯めた金を携えて帰り故郷で錦を飾ることを目論んでいた。この時期の日本人の「海外移住」が「海外出稼ぎ」に過ぎないといわれる所以はここにある。

早くに太平洋を渡った書生や出稼ぎ労働者は、当初の目標をハワイやアメリカ西海岸で達成し、望み通りに母国へ帰ることができたが、なかにはいろいろな事情があり帰国できなかった人もいた。彼らは渡航先で出稼ぎ期間を延長し、やむを得ずその地に留まっていたが、20世紀初め頃には、そのような日本人の数が年々増えるようになった。同時に、その頃日本では海外出稼熱が高まり、『海外渡航案内』などによる渡米の奨励が盛んになっていて、出稼ぎ希望の渡米者の数も激増した。

一方アメリカ合衆国では、1880年代後半から、市民の多くが国策として移住制限の実施が必要と考えるようになっており、彼らはハワイやアメリカ西海岸地域で出稼ぎを延長する日本人一時滞在者と渡米出稼者の増加を、制限の対象とすべき「好ましからざる東洋移民」の増加と関連づけてしまった。その結果、合衆国西海岸では「黄禍」に怯えるアメリカ人が「日本人移民排斥」の声を高めるようになった。20世紀初頭には、「日本人のハワイ転航」と1906年にサンフランシスコで起きた「日本人学童隔離騒動」が日米関係を悪化させる一大要因となり、「日本人移民問題」の根本的解決が望まれるようになった。

(阪田 安雄)



10. 官約移民労働約定書 1885年 複製



11. ハワイ行き出稼人に対する広島県知事 鍋島幹の訓告 1893年 複製



12. 日本人排斥主義者の著書

米ユービー鉄道

●ユービー鉄道は合衆國と東西を横斷せる延長數千哩に達せる大鐵路なり
●ユービー鐵道の人は悉く日本人にして其待遇最良なり
●ユービー鐵道線路の通過せる地方の春夏秋冬共に氣候溫和にして用永佳良
●ユービー鐵道の絶ゆる事無し
●ユービー鐵道の玉夫は同社線内同千里の地を往來するの溜車賃を要せず
●ユービー鐵道は多くの鐵道中實銀最も高く一哩三十五仙より一哩六十仙の利益を支拂ふ故に一年の所得は四百萬乃至五百萬に達す
●ユービー鐵道にては玉夫の爲めに醫藥の準備をせし萬一の適合する助法の設けあり
●ユービー鐵道は特に工夫食料節儉を勵引せる爲め物價高からず貯蓄せし事甚だ容易なり
●時間上猶ほ余り時間増しあり望みによりて日曜日の労働をなすは差支へず給金の支拂は確實なる事ユービー鐵道の右に出づる者なし

米ユービー鐵道 協本事務所 西村

13. アメリカ本土への転航を勧めるユービー鉄道会社の日本人労働請負業者のちらし 1906年

●渡米者募集廣告

桑港 株式 日米勸業社 所屬人夫二千二人

◎本社經營の鐵道は諸國の二百里に及ぶ長き鐵道に
◎本社は米海峽の諸島に於ては其經營も亦諸島に及ぶ
◎本社は米海峽の諸島に於ては其經營も亦諸島に及ぶ
◎本社は米海峽の諸島に於ては其經營も亦諸島に及ぶ
◎本社は米海峽の諸島に於ては其經營も亦諸島に及ぶ
◎本社は米海峽の諸島に於ては其經營も亦諸島に及ぶ
◎本社は米海峽の諸島に於ては其經營も亦諸島に及ぶ
◎本社は米海峽の諸島に於ては其經營も亦諸島に及ぶ
◎本社は米海峽の諸島に於ては其經營も亦諸島に及ぶ
◎本社は米海峽の諸島に於ては其經營も亦諸島に及ぶ

右御望の方は下名へ御申込の上、各
旅館へ隨意御投宿ありたし、△乗船は、ワシントン
ニ、會社に屬する定期船

注意◎御
我日米勸業社は唯徒らに聲を大にして渡米
者ぞ勸奨するものに非ずして其目的とする
所は米大陸中部の沃野に同胞の發展を企て
一面以て相互の利益を圖ると共に更に之を
推し以て日米兩國の公益を裨助せんとするに
あり請ふ有志の諸君奮つて我社の許に來り
就職せよ

桑港 株式 日米勸業社
（郵箱八七五） 青洲出賃員 黒石清 作

14. アメリカ西海岸への転航を勧めるサンフランシスコの日本人労働請負業者のちらし 1906年

ハワイへの官約移民

1885年から1894年までの10年間に、日本とハワイ王国政府間で結ばれた「移民協約」に基づいて、2万9千余の日本人労働者が、ハワイ諸島のサトウキビ・プランテーションで3年間就労する契約で渡航した。いわゆる「官約移民」と呼ばれる人たちである。よく「日本人は金儲けのために海外へ出稼ぎに行った」といわれるが、そんな理由だけで決心できることではなかった。海外出稼ぎがはじまった頃の日本は、幕末に開国してから四半世紀しかたっておらず、海外の事情を詳しく知っている人は日本にはまだ多くいなかった。その時期に、生まれ親しんだ故郷と親族、友人に別れを告げて、まだ見たこともない太平洋上の島へ海を越えて、それまで経験したことのない仕事に就くため赴くことは、非常な勇気と決断を要する行為であったことが理解されよう。

最初は、日本全国から希望者を募ることになっていたが、広島、山口、熊本、福岡4県の農村出身者がプランテーションにおける厳しい労働に耐えられると、ハワイ移民局などが判断したこともあり、1886年以降の募集は主にこれらの4県で行われた。結果、官約移民の38.1%が広島県、35.9%が山口県、14.6%が熊本県、7.5%が福岡県出身者、いいかえると、総数の96.1%がこれら4県から応募した人たちで占められることとなった。正確な統計はないが、彼らの多くは10年以内にハワイでの出稼ぎを終え、蓄えた金を携えて故郷へ帰っているが、40%内外はハワイ諸島に留まったと推定される。官約移民終了後は、移民会社や移民斡旋業者あつせんが農村出身の日本人を契約労働者としてハワイへ送った。

(阪田 安雄)



15. ハワイへの官約移民コーナー展示風景

◆情報展示としてのシステム解説

音声のみによる展示表現も統合情報展示コンピュータシステムに組み込まれて実現されている。デジタル音声処理を用いて劣化しない明瞭な音声を資料として提供する。データベースよりデータ供給するので音声等の入れ替えも容易である。このコーナーではハワイの日系人の仕事歌である「ホレホレ節」を聞くことができる。個人向けのヘッドフォンと多人数向けのスピーカーシステムがカードで切り替えられるように設計しており、公共情報空間における静粛性と団体対応の両立をはかっている。(山本 匡・福田 直毅)

書生

1881年頃から、日本人書生が合衆国西海岸のサンフランシスコ^{わんがん}湾岸地域へ個人で渡航しはじめていた。外務大臣宛の書生の報告書に、1890年、4千人近い日本人が、^{サンフランシスコ}桑港や^{オークランド}王府に居住しており、大部分が書生である、と記されている。書生の多くは、日本近代化の知的指導者の勧めに応じて、帰国した際に日本で役立たせることができる知識や技能を、驚異的な発展を遂げるアメリカで習得するため同地に渡った。しかし、ほとんどが一銭の蓄えもない貧乏書生であったため、数人が「穴蔵同様の地下部屋」一室を借りて寝起きし、労働の合間に勉学を続けるという苦しい生活を体験した。裕福なアメリカ人家庭で昼間は召使いとして働き、夜間に学校に通う、いわゆる「スクール・ボーイ」としての生活は、当時としては恵まれたものといえよう。これらの書生は、桑港や王府でさまざまな政治的あるいは宗教的団体をつくった。キリスト教系書生の「福音会」、いわゆる「民権派」書生が設立した「日本人有志愛国同盟」、あるいは「海外実業会」や「惟一会」に所属する書生が組織した「遠征社」などが代表的なものである。「日本人有志愛国同盟」は新聞『第十九世紀』、『自由』、『愛国』を、「遠征社」は雑誌『遠征』を発刊した。これら書生の中には、アメリカ滞在中に学んだことや実体験したことを活かし、帰国後日本で活躍した人物がいる。一方、合衆国に留まって、日本人社会の指導者となった旧書生も多くいる。日本人出稼ぎ労働者がハワイやアメリカ合衆国西海岸で定住する覚悟を決めた際、アメリカの事情に精通し、英語に堪能な「居残り書生」が在米日本人社会の指導者として果たした役割は非常に大きい。（阪田 安雄）



16. 書生コーナー展示風景

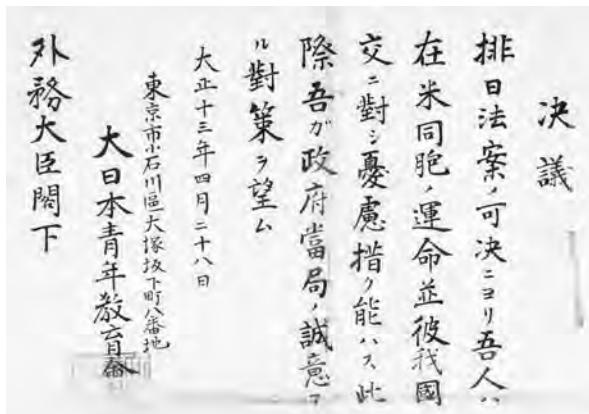
Ⅲ期 定住移民(移殖民)のはじまり

門戸を閉じるアメリカ合衆国

日米間の緊張緩和を図り、両国間で外交上の懸案事項となっている「日本人移民」に関連する諸問題を解決するため、1906年11月から翌1907年2月にかけて、のちに「紳士協約」として知られるようになる、11の覚書に両国政府代表が調印した。この協約に基づき、ルーズベルト大統領は、1907年3月、行政命令589号を発し、日本政府が発行するハワイ行き旅券を所持する日本人労働者のアメリカ合衆国本土の港での上陸を禁止した。

両国政府は交渉を更に継続し、1907年11月から翌1908年2月にかけて、「紳士協約」条項の実施を促進するための7つの「補足覚書」に調印した。日本政府は、1908年2月、労働を目的としハワイおよび合衆国本土へ渡航を望む日本人への旅券交付を、同地域にすでに在住している日本人が呼び寄せる親族を例外として、自主的に停止することを約束した。その結果、太平洋を渡って北アメリカに赴く日本人の数は激減した。

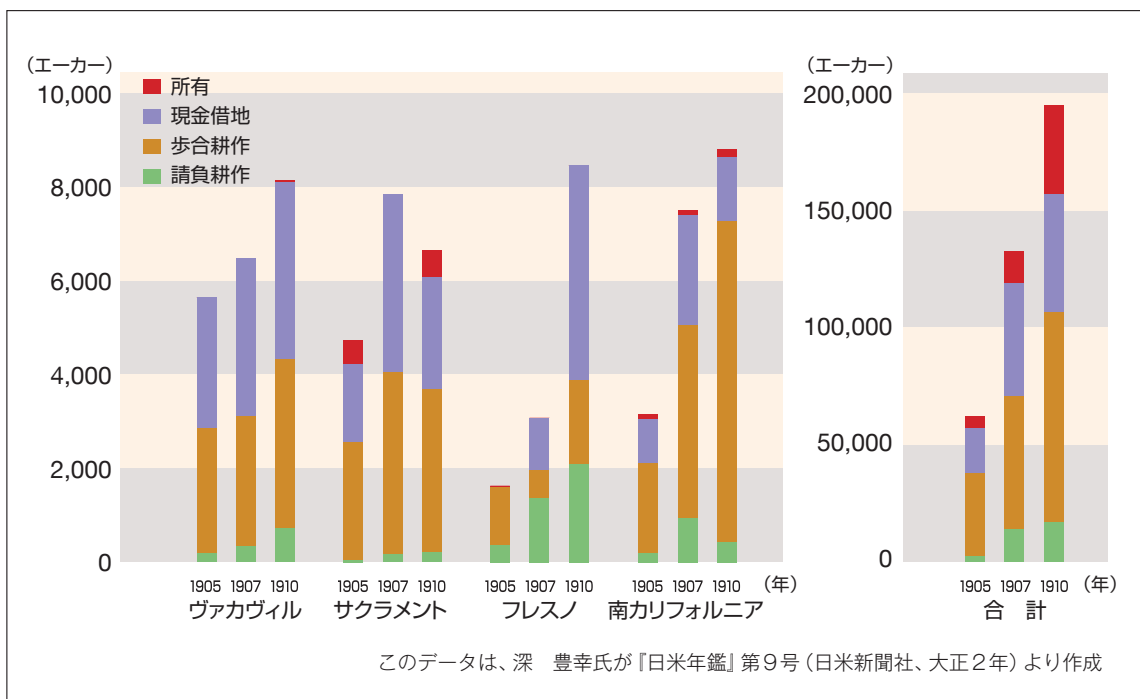
だがその後も、日本人排斥主唱者は日本人移住者にたいする非難や攻撃を続け、合衆国西海岸におけるアメリカ人の日本人に対する排斥感情は鎮静する兆しを見せなかった。独身者にとって深刻な事態である「写真結婚禁止」、更に定住をめざす一世の経済的基盤を覆す「外国入土地法の制定」など、アメリカに在住する日本人の生活や将来に直接影響をおよぼす、さまざまな出来事が矢継ぎ早に発生した。さらに1924年には、合衆国連邦議会が制定した「出身国別移民割当法」に、合衆国帰化法では日本人が「帰化不能外国人」と裁定されていることを根拠として、日本人の移民としての合衆国への入国を認めない条項を挿入し、日本人の合衆国への移住を全面的に禁止した。この法律が日本で「排日移民法」と呼び称されている所以はここにある。1885年の官約移民のハワイ王国への渡航ではじまった、太平洋を渡る北アメリカへの日本人移住の歴史の幕は、ここで下ろされることとなった。(阪田 安雄)



17. 「排日移民法」通過への反響 青年教育会決議 1924年4月28日

■ カリフォルニア州における日本人の農地使用データ

1890年代には多くが出稼ぎ季節労働者でしかなかった日本人は、1900年代後半から1910年代にかけて、農地を所有、借地し定着しはじめるようになった。この現実には、日本人には誇りとなったが、日本人排斥を唱えるアメリカ人には、「白人農家の生活を脅かす危険な現実」に思えた。そのため、日本人排斥論者は、こうした統計上の数値を巧みに操作し、アメリカ人の排日感情をあおり立てるのに用いた。



18. カリフォルニア州における日本人の農地使用データ

南米へ向かう国策移民

北アメリカで排日気運が高まりはじめた20世紀初頭に、日本における海外移住熱は異常な高まりを示すようになっており、日本政府は北アメリカ以外の地域を対象とした移殖民送出を勧案するようになった。

最初は、アメリカ合衆国に隣接するメキシコや、南アメリカ西海岸のペルーなどへの移住が企画実行されたが、初期の段階で計画は頓挫した。最終的には、当時の日本政府当局者がもっとも条件が整ったと判断した、南アメリカ大西洋岸のブラジルが北アメリカの合衆国および英領カナダにかわる日本人の移住先として選ばれ、1908年4月に神戸港を出発した「笠戸丸」に乗船した781名の日本人移住者のブラジルのサントス港到着により、南アメリカへの日本人の移住がはじまった。第一次世界大戦中(1914—1918)、日本は一時的な経済的繁栄を経験するが、戦後には景気が後退し、農村部では不況が慢性化していた。このような国内事情を反映して、政府は農村からの南アメリカへの移殖民の送出を、国内問題解決の重要な一策として重視するようになった。合衆国が1924年にいわゆる「排日移民法」を制定して日本人移住者の入国を全面的に禁止した翌1925年からは、ブラジルへ移住する日本人の数は急増しはじめた。1908年の「笠戸丸」の出発から、1941年に日本を出発した戦前最後の移住者輸送船「ぶえのすあいれす丸」のブラジルへの航海までの33年間に、延べ18万8千人余の日本人が移殖民としてブラジルへ送られた。彼らの3分の2にあたる12万余が、1925年から1941年までの16年間に、ブラジルへ渡っている。太平洋戦争の勃発は、日本人の南アメリカへの移住を一時中断することになった。

ブラジルへの移住の特徴は、その多くが家族移住者であったことである。単身移住者もいたが、それは全体の6%に過ぎなかった。当初はコーヒー農園などで、馴れない苛酷な農作業に従事し、苦勞したが、辛抱よく移住地における経済的および社会的基盤を築いていった。

(阪田 安雄)

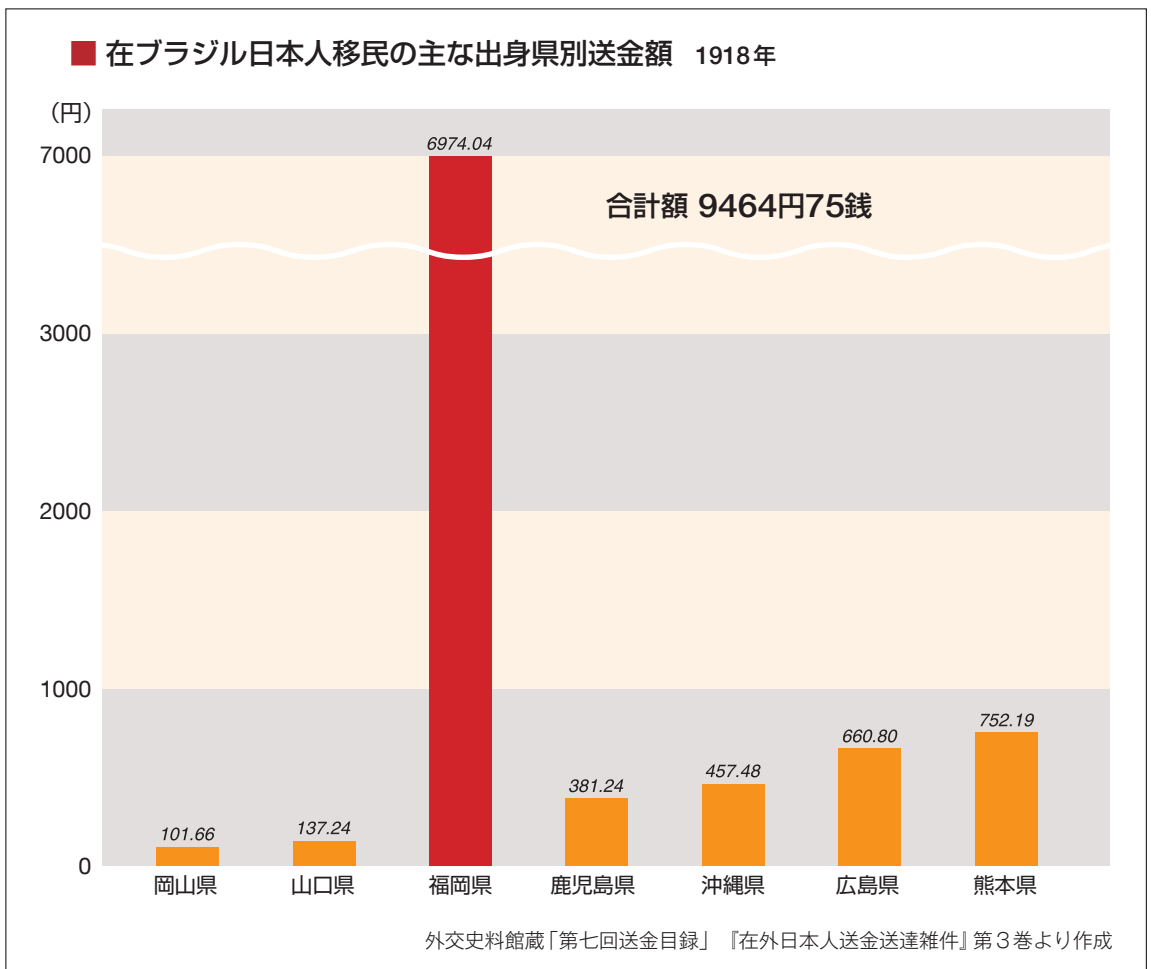


19. アリアンサ移住地コーナー展示風景

アリアンサ移住地

ブラジルでは1910年代になると、コーヒー農園の労働契約に見切りをつけ、独立農をめざした人たちによって、日本人だけの「移住地」（自作農の集団地）がつくられはじめた。そして1920年代になると、出稼ぎだけではなく、はじめから定着を意図した移住地が計画されるようになる。その典型は、1925年から移住が開始されたサンパウロ州西部のアリアンサ移住地である。移民たちは長野県、鳥取県、富山県などの移住組合や民間の力行会の支援を受けて続々と入植しはじめた。ここでは「コーヒーをつくるより人をつくれ」という高い理想がかかげられ、森林を伐採し、山を焼き、農業を営んで、定着にむけての努力が必死で続けられた。

（中牧 弘允）



20. 在ブラジル日本人移民の主な出身県別送金額 1918年

IV期 海外移住の中断

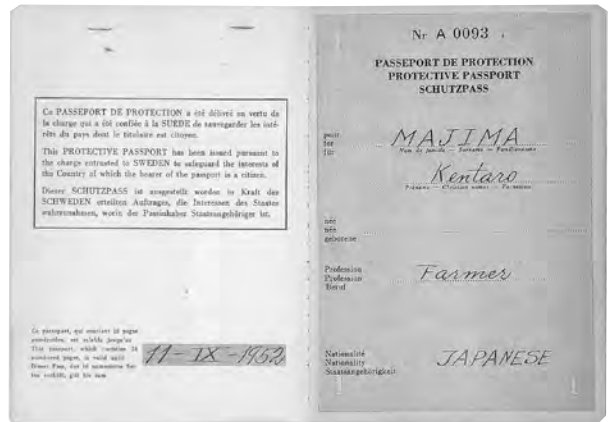
戦時下の海外移住者と家族

真珠湾攻撃にはじまった第二次世界大戦は、日本人の海外移住を中断させただけでなく、アメリカ大陸に移住して^{てきせい}いて、敵性外国人とみなされるようになった日本人とその家族に、大きな犠牲を強いることになった。北米においては、合衆国本土および英領カナダの西海岸地区に在住していた人たちが、戦時下の国家安全保障を理由とする政府の行政命令により、人里離れた地域に強制退去させられ抑留生活を強いられた。合衆国では約11万人、英領カナダでは約1万1千人が強制立ち退きと収容の対象となった。その結果、日本人移住者と家族が被った経済的ならびに精神的打撃は計り知れないものであった。

第二次世界大戦は中南米に在住する日本人とその家族にも影響をおよぼした。日本人移住者の数がそれほど多くなかった、メキシコ、エクアドル、チリでは、敵性外国人となった在住日本人たちを一定の都市に移させるか、あるいは特定の都市から地方に移住させたが、北米のように行動の自由を奪うようなことはしなかった。南米で最も厳しい措置が強行されたのはペルーで、港周辺や特殊軍事指定地域から、数百人におよぶ日本人移住者と家族を短期間に強制立ち退きさせた。また、ペルーの日本人社会の指導者と見なされていた160人余の日本人は戦争勃発直後官憲に検挙され、後にアメリカ合衆国に送られて収容所に監禁された。

南米で日本人移住者の数が最も多かったブラジルでは、第二次世界大戦の戦局が彼らに直接影響するようなことはなかったが、ブラジル沿岸における枢軸国ドイツの対敵行為が、時には憤慨する大衆のドイツ人商店の掠奪や破壊行為を引き起こし、同盟国民である日本人の商店も被害を被った。また、サンパウロ市や他の州で、在留日本人が特定の地域から強制立ち退きを命じられ、一部の日本人移住者は労働力不足が深刻であった奥地の耕地に農業労働者として送られたこともあった。しかし、南米では合衆国本土における日本人居住者の大部分が強制収容されるような事態は起きなかった。

(阪田 安雄)



21. スウェーデン政府発行のパスポート 複製



22. 日本軍機真珠湾を攻撃『ホノルル・スター・ブレットイン』号外 1941年12月7日 複製版

**WESTERN DEFENSE COMMAND AND FOURTH ARMY
WARTIME CIVIL CONTROL ADMINISTRATION**

**Presidio of San Francisco, California
May 3, 1942**

**INSTRUCTIONS
TO ALL PERSONS OF
JAPANESE
ANCESTRY**

Living in the Following Area:

All of that portion of the City of Los Angeles, State of California, within that boundary beginning at the point at which North Figueroa Street meets a line following the middle of the Los Angeles River; thence westerly and following the said line to East First Street; thence westerly on East First Street to Alameda Street; thence southerly on Alameda Street to East Third Street; thence northwesterly on East Third Street to Main Street; thence northerly on Main Street to First Street; thence northwesterly on First Street to Figueroa Street; thence northwesterly on Figueroa Street to the point of beginning.

Pursuant to the provisions of Civilian Exclusion Order No. 33, this Headquarters, dated May 3, 1942, all persons of Japanese ancestry, both alien and non-alien, will be evacuated from the above area by 12 o'clock noon, P. W. T., Saturday, May 9, 1942.

No Japanese person living in the above area will be permitted to change residence after 12 o'clock noon, P. W. T., Sunday, May 3, 1942, without obtaining special permission from the representative of the Commanding General, Southern California Sector, at the Civil Control Station located at:

Japanese Union Church,
129 North San Pedro Street,
Los Angeles, California.

Such permits will only be granted for the purpose of uniting members of a family, or in cases of grave emergency.

The Civil Control Station is equipped to assist the Japanese population affected by this evacuation in the following ways:

1. Give advice and instructions on the evacuation.
2. Provide services with respect to the management, leasing, sale, storage or other disposition of most kinds of property, such as real estate, business and professional equipment, household goods, boats, automobiles and livestock.
3. Provide temporary residence elsewhere for all Japanese in family groups.
4. Transport persons and a limited amount of clothing and equipment to their new residence.

The Following Instructions Must Be Observed:

1. A responsible member of each family, preferably the head of the family, or the person in whose name most of the property is held, and each individual living alone, will report to the Civil Control Station to receive further instructions. This must be done between 8:00 A. M. and 5:00 P. M. on Monday, May 4, 1942, or between 8:00 A. M. and 5:00 P. M. on Tuesday, May 5, 1942.

2. Evacuees must carry with them on departure for the Assembly Center, the following property:

- (a) Bedding and linens (no mattress) for each member of the family;
- (b) Toilet articles for each member of the family;
- (c) Extra clothing for each member of the family;
- (d) Sufficient knives, forks, spoons, plates, bowls and cups for each member of the family;
- (e) Essential personal effects for each member of the family.

All items carried will be securely packaged, tied and plainly marked with the name of the owner and numbered in accordance with instructions obtained at the Civil Control Station. The size and number of packages is limited to that which can be carried by the individual or family group.

3. No pets of any kind will be permitted.
4. No personal items and no household goods will be shipped to the Assembly Center.
5. The United States Government through its agencies will provide for the storage, at the sole risk of the owner, of the more substantial household items, such as iceboxes, washing machines, pianos and other heavy furniture. Cooking utensils and other small items will be accepted for storage if crated, packed and plainly marked with the name and address of the owner. Only one name and address will be used by a given family.
6. Each family, and individual living alone, will be furnished transportation to the Assembly Center or will be authorized to travel by private automobile in a supervised group. All instructions pertaining to the movement will be obtained at the Civil Control Station.

Go to the Civil Control Station between the hours of 8:00 A. M. and 5:00 P. M., Monday, May 4, 1942, or between the hours of 8:00 A. M. and 5:00 P. M., Tuesday, May 5, 1942, to receive further instructions.

J. I. DeWITT
Lieutenant General, U. S. Army
Commanding

128 CIVILIAN EXCLUSION ORDER NO. 33

23. 西部防衛司令官の強制退去命令の公布広告 1942年(英文)



24. トバース強制収容所風景(版画)
1943年 アメリカ ユタ州
モノタイププリント 日比松三郎 作

V期 戦後移住のはじまり

変容する日系人社会と再開される中南米への移住

戦時下の体験および日本の敗戦というみじめな現実、海外に在住する日本人とその家族に精神的な衝撃をもたらした。その結果、アメリカ市民である日系二世などは、意識的に親の母国である日本とのつながりや日系二世としてのアイデンティティさえも否定しようとした。その一方、日本に親戚や知人を持つ一世移住者たちの多くは、敗戦で荒廃した祖国日本における日本人の窮状を伝え知り、「同胞」に援助の手を差し伸べるべく奔走した。「アジア救済公認団体、略称LARA」を通して日本に送られた、食料、衣類、医薬品、生活必需品、学用品などからなる「救援物資」の20%は、南北アメリカに在住する「日系人」が集め寄贈したものと記録されている。

その他、戦後の海外日系人および日本人海外移住に関し、記録に値する三つの大きな出来事が挙げられる。第一は、日本人の帰化を法律上認めていなかったアメリカ合衆国で、1952年に新しい移民法が施行され、日本人も帰化できるようになったことである。一世の平均年齢はすでに60才近くに達していたが、彼らの多くが帰化試験講座に通って努力を重ね、試験に合格して晴れて市民権を獲得した。

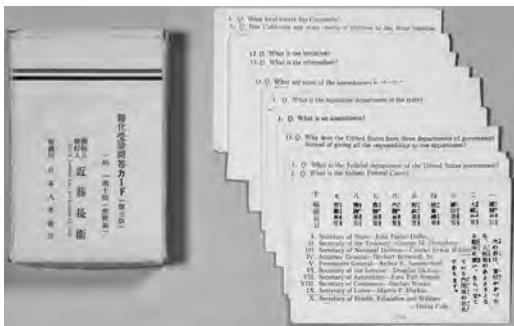
第二は、日本人の南アメリカへの移住の再開があげられる。ブラジル在住日本人の努力の結果、日本政府から渡航費が貸付けられた、「辻梓移民」の第一陣18家族54名が1953年2月に「サントス丸」でリオに渡り、次いで「松原梓移民」の第一陣22家族112名もオランダ汽船「ルイス号」でサントスに到着し、南米への移住が再開した。ブラジル以外に、パラグアイ、アルゼンチン、ボリビア、ドミニカ共和国などへも戦後の移住者が渡ることになった。これらの諸国への渡航者には多くの沖縄出身者が含まれている。

第三の戦後において記録されるべき出来事は、北アメリカにおける日系人強制収容の補償問題の解決であろう。1988年8月10日、ロナルド・レーガン大統領が補償法案に署名し、同年9月22日にカナダ政府も同様に法案への署名を行った。

(阪田 安雄・小嶋 茂)



25. 日本行慰問品目録 複製
1948年 アメリカ カリフォルニア州
サンフランシスコ



26. 帰化試験受験のための「問答カード」
帰化試験を受けるには英語の能力がまだ充分でない一世のために「受験突破」のためのさまざまな「手引書」が作られた。
アメリカ カリフォルニア州ロサンゼルス



27. 帰化試験に合格して市民権取得に際しての「忠誠の誓い」複製

最後の移民船につぼん丸

1960年代までの移民の渡航はもっぱら航路にたよっていた。とくに南米への集団移住では横浜や神戸を出港する移民船が活躍した。しかし、空路の発達にともない、移民船は主役の座を追われることになる。また、1960年代の日本の高度経済成長は、国内での豊かな生活をもたらし、海外移住を減速させる原因となった。南米への最後の移民船となったのは、1973年2月14日、285名の移住者を乗せて横浜を出航した「につぼん丸」である。「につぼん丸」は二代目「あるぜんちな丸」を改装した客船であり、世界一周クルーズの客も多数乗船していた。ちなみに、神戸港からの最後の移民船は、1971年5月3日に出航した「ぶらじる丸」である。

(中牧 弘允)



28. 横浜移住斡旋所 1956年



29. 日本人移住を記念した刊行物

◆情報展示としての環境情報システム

環境情報システムは、展示表現において主展示資料の補助的環境情報をマルチメディアデータを用いて付与するものである。例えば、歴史展示では展示資料の時代背景や用途、使われ方などを展示資料と一体的に示すことができる。それによってより立体的な歴史理解の促進が期待される。本展示では多元分割画面システムを用いて、主に歴史背景に関する動画をデータベースサーバより供給し、動画に同期して説明画面が流れる。日本語・英語のみならず多言語に対応する。また、カードを用いた画面の切り替えも可能である。

(山本 匡・福田 直毅)

年表

I期 1853—1884

西暦	暦年	
1853	嘉永6年	「黒船」が浦賀に来航、ペリー提督幕府に開国を迫る
1854	嘉永7年	幕府がペリー提督と「日米和親協約」を締結
1856	安政3年	アメリカ合衆国領事タウンゼント・ハリス下田に着任
1858	安政5年	幕府が米英仏蘭露5国と修好通商条約(安政の「不平等条約」)を締結
1859	安政6年	幕府は神奈川(横浜)、長崎、函館を開港し条約締結国と通商を開始
1861	文久元年	アメリカ合衆国国務省の「移民統計報告」に記録された最初の「日本移民」はサンフランシスコに1月—3月に上陸した20~25才の男性召使い
1866	慶応2年	幕府は海外渡航希望者に「御免の印章」を下付する旨触書で通告し、留学生ならびに外国人に雇われた召使いや曲芸師などに印章の交付をはじめ
1868	慶応4年	戊辰の役(維新戦争)はじまる
1868	明治元年	アメリカ人ヴァン・リードが居留地神奈川(横浜)で集めた日本人150名余(元年者)を維新政府の許可なしにサンドウィッチ島(ハワイ)へ出発させる 同じくヴァン・リードが居留地神奈川で集めた日本人42名を条約国でないスペインの領土グアム島へ送るが、明治政府はその事実を認知せず
1869	明治2年	日本在住オランダ人ヘンリー・シュネールが約15名の日本人と合衆国カリフォルニア州エルドラド郡ゴールドヒルに「コロニー」建設を計画し挫折する 6月17日付サンフランシスコ『クロニクル』新聞が合衆国へ亡命中の元幕府外国総奉行塚原但馬守昌義の消息を伝える記事を掲載
1870	明治3年	ハワイへ渡った「元年者」のうち60余名が明治政府の許可を得てアメリカ合衆国西海岸へ出稼ぎに赴き40名が日本へ帰還 アメリカ人ガルトネルが日本人250名を合衆国ルイジアナ州でサトウキビの植付けと栽培に雇用するため明治政府に認可を申請するが、政府は許可せず
1871	明治4年	駐日オランダ公使が外務卿澤宣嘉に日本人兵卒500名を傭兵としてオランダ領植民地へ派遣したい旨申し出るが、外務卿は謝絶
1872	明治5年	横浜で「マリア・ルース号事件」が発生し、明治政府は同船に乗船していた清国「苦力」を解放して帰国させ、「苦力貿易」反対の断固たる意志を表明 明治政府は「人身売買禁止令」を制定し、同時に外国人に雇われて出国する日本人労働者の海外滞在期限を1か年に限定
1874	明治7年	サンフランシスコ日本領事館の報告によると合衆国カリフォルニア州在住の邦人数は男子67名、女子8名、幼児4名
1876	明治9年	佐藤百太郎に率いられた「オーシャンック・グループ」一行5名が合衆国ニューヨーク市で日本生糸や雑貨の直売をはじめするために渡米
1880	明治13年	合衆国サンフランシスコ市在住の日本人が、同港に来航した日本海軍軍艦「筑波」の乗組員の歓迎会を開催し80名が出席
1882	明治15年	アメリカ合衆国連邦議会が「清国人移民法」を制定し、清国人労働者の入国を10年間禁止
1883	明治16年	明治政府が「徴兵令」を改正するが、海外留学中の男子には徴兵猶予を認めたため徴兵逃れの海外留学を希望する若者の数がこの年から急増 イギリス人ジョン・ミラーが濠州トレス海峡の木曜島における真珠貝採取に日本人潜水夫を雇用するための許可を明治政府に申請し、政府が認可
1884	明治17年	ハワイ王国政府は総領事ロバート・アーウィン日本人契約労働者のハワイ諸島への渡航周旋を目的とする同国政府移民局代理人に任命 福澤諭吉が『時事新報』に「米国は志士の棲家なり」と「移住論の辨」を掲載して若者の渡米を奨励



Ⅱ期 1885—1907

西暦	暦年	
1885	明治18年	1月28日 第1回「ハワイ官約移民」945名が横浜を出発 2月 合衆国連邦議会が「契約労働者法」を制定し契約労働者の入国を禁止 12月4日付「官報」によると「米国 桑 港および其近傍在住本邦人は557名」
1886	明治19年	1月 日本とハワイ王国政府が「移民渡航協約」を締結
1887	明治20年	本年、志賀重昂著『南洋時事』と武藤山治著『米国移住論』が「余剰人口」の海外移住を奨励
1891	明治24年	3月 合衆国連邦議会が「移民法」を制定し連邦政府移民局を設置 4月 サンフランシスコ市発刊の英字新聞が日本人労働者攻撃をはじめ 6月 サンフランシスコ市で「大日本人会」が創設される 8月 海外移住奨励を目的とする移民課が外務大臣官房に設置される 9月 恒屋盛服が「海外植民論」を出版し日本人の海外発展を奨励 12月 「日本吉佐移民合資会社」が設立される
1892	明治25年	3月 外務大臣榎本武揚がメキシコ開拓を計画
1893	明治26年	1月 ハワイ王国で革命が勃発し2月に王朝が崩壊 2月 日本殖民協会が設立され榎本武揚が初代会長に就任 3月 合衆国サンフランシスコ教育委員会が日本人学童隔離教育決議を採択するが、同市の大日本人会が抗議し撤回させる
1894	明治27年	4月 日本で「移民保護規則」が制定され移民斡旋業者の営業活動を公認 6月 「官約移民」のハワイ渡航が終わりいわゆる「私約」移民の渡航がはじまる 7月 日英修好通商条約が締結され「不平等条約」が改正される 8月 日清戦争が勃発
1895	明治28年	11月 日本とブラジル政府が修好通商航海条約を締結
1896	明治29年	1月 「移民保護規則」にかわり「移民保護法」が施行される 8月 日本郵船会社がシアトル航路を開設
1897	明治30年	5月 榎本武揚がメキシコに日本人労働者34名を入植させる 2-3月、ハワイのホノルル港で1,000名以上の日本人の上陸が拒否される
1898	明治31年	8月 アメリカ合衆国がハワイを併合し日本政府が強く抗議 9月 日本人契約労働者の入国を許可するペルー大統領令が发布
1899	明治32年	2月 ペルー行第1回移民790名が出発 11月 ハワイ・ホノルルのチャイナ・タウンで「黒死病騒動」が発生
1900	明治33年	本年 ハワイ行き旅券を所持する日本人労働者のアメリカ西海岸への転航がはじまり、その数が年々増加する 1月 沖縄から最初の移住者27名がハワイのホノルル港に到着 3月 「偽造旅券」所持者のアメリカ西海岸西北部への渡航が急増 5月 合衆国サンフランシスコ市で市民大会が開かれ排日決議が採択される 6月 サンフランシスコ市に在留の日本人が日本人連絡協議会を創設 8月 日本政府は合衆国西海岸で高まる排日気運に対処するため、合衆国本土と英領カナダへ向かう日本人労働者にたいする旅券の発行を一時停止
1902	明治35年	6月 日本政府は合衆国に在留している日本人親族の呼び寄せ渡航を許可
1904	明治37年	2月10日 日露戦争が勃発
1905	明治38年	2月 サンフランシスコ『クロニクル』紙が方針を改め日本人排斥を表明 8月 サンフランシスコに東洋人排斥同盟が設立される
1906	明治39年	4月18日 サンフランシスコ大地震が発生して大火が市の大部分を壊滅させる、同市在住日本人罹災者は1万人と推定される 10月 サンフランシスコ市教育局が日本人学童の清国人学童隔離学校への転学を命じる決議を採択し、即時実施をはかり「日本人学童隔離騒動」に進展 11月 「学童隔離事件」および「日本人ハワイ転航問題」の解決をはかるための日米政府間の協議がはじまる
1907	明治40年	2月 日本外務大臣と駐日アメリカ大使が前年11月から続けられた交渉で得た合意事項を確認する11の覚書(いわゆる「紳士協約」)を承認 3月 セオドール・ルーズベルト大統領は「紳士協約」に基づき大統領行政命令を発し、日本人労働者のハワイから合衆国本土への転航を禁止 5月 サンフランシスコ市で暴徒が日本人経営のレストランを襲撃 9月 英領カナダのバンクーバー市で清国人および日本人にたいする「暴動事件」が発生 11月 皇国殖民会社社長水野龍がブラジルのサンパウロ州政府と日本人移住者導入契約を締結

Ⅲ期 1908—1940

西暦	暦年	
1908	明治41年	1月 合衆国サンフランシスコ市で在住日本人が日本人会を設立 日本とカナダ政府がレミュエ協定を結び移住する日本人の数を制限 4月 第1回ブラジル行移民781名を乗せた「笠戸丸」が神戸港を出航 本年より合衆国在住日本人親族の呼び寄せと「写真花嫁」の渡航が本格化
1909	明治42年	5月 ハワイ・オアフ島のサトウキビ耕地で日本人労働者がストライキに突入
1913	大正2年	3月 日本の官民有力者がブラジル拓殖株式会社を設立し移住促進を図る 4月 カリフォルニア州議会は「外国人土地法」を制定し「帰化不能外国人」である日本人農家の土地購買ならびに所有を禁止
1914	大正3年	2月 日本でブラジルへの移住促進のため日本移民協会を設立
1916	大正5年	3月 ブラジル移民組合がブラジル・サンパウロ州のアンツォネス・ドス・サントス会社と日本人移住者2万人を送る契約を締結 7月 日本政府は国籍法を改正し条件付きで二世の日本国籍放棄を認める
1917	大正6年	12月 日本で移民会社を統合し海外興業株式会社（海興）を設立
1918	大正7年	11月 第一次世界大戦が休戦
1919	大正8年	1月 第一次世界大戦終結後合衆国で排日気運が再燃 7月 日本語学校取締法案がハワイ准州議会を通過 8月 ウェルサイユ平和会議は日本が提起した「人種平等条項」を否決
1920	大正9年	1月 ハワイ・オアフ島のサトウキビ耕地で第二次ストライキがはじまる 2月 日本政府が「写真結婚者」への旅券交付を中止 11月 合衆国カリフォルニア州で一般投票により日本人の借地権を剥奪する「外国人土地法」が成立し西部諸州でも同様の外国人土地法を制定
1921	大正10年	7月 合衆国ハワイ准州で外国語学校取締法が施行される
1922	大正11年	1月 日本で信濃海外協会が設立され、1924年10月にブラジル国アリアンサに移住地を開設 11月 合衆国最高裁判所は小沢孝雄訴訟の審査で合衆国在住の日本人が「帰化不能外国人」であることを決定づける判決を下す
1923	大正12年	9月 関東大震災、震災罹災者のうち、ブラジルへ移住する者にたいする船賃補助がはじまる
1924	大正13年	5月 合衆国連邦議会在「帰化不能外国人」の移住を禁じる条項を「出身国別移民割当法」に挿入し、日本人の同国への入国を全面的に禁止 11月 日本国籍法が改正され二世の国籍放棄ならびに離脱が認められる 本年、日本政府が渡航費を全額補助するブラジル行き移住がはじまる
1927	昭和2年	2月 ハワイ准州における外国語学校取締法関係訴訟で連邦最高裁判所が日本語学校側に勝訴の裁定を示す 3月 日本で海外移住組合法が制定され、8月に海外移住組合連合会が創設される 12月 ブラジルで日本人移住者がコチア産業組合を創設
1928	昭和3年	3月 神戸に国立移民収容所が設立される 8月 南米拓殖株式会社が設立され、ブラジルのアマゾン地域への移住を開始 9月 日本人移住を促進するためアマゾン興業株式会社が設立される
1929	昭和4年	3月 海外移住組合連合会の現地組織としてブラジル拓殖組合が設立される 10月 合衆国で株の大暴落がはじまり「世界大恐慌」時代に入
1930	昭和5年	4月 上塚司が高等拓殖学校を設立し翌年に「高拓生」をブラジルへ送る 9月 合衆国で二世が全米日系市民協会（JAACL）を結成
1931	昭和6年	9月 満州事変が勃発
1934	昭和9年	7月 ブラジル政府が「外国移民二分制限法」を公布
1935	昭和10年	本年、パラグアイ政府が日本人移民100家族の入国を許可
1936	昭和11年	6月 ペルー政府が「移民および営業制限令」を公布
1937	昭和12年	7月 盧溝橋事件が発生し日中戦争がはじまる
1938	昭和13年	12月 ブラジル政府が新移民法を施行し、すべての日本語学校を閉鎖
1939	昭和14年	7月 合衆国政府が日米通商条約の6ヵ月後の失効を日本政府に通告し、翌年1月に同条約が失効
1940	昭和15年	5月 ペルーのリマ市およびその周辺耕地で日本人にたいする掠奪がはじまる 9月 日独伊三国軍事同盟が調印される

IV期 1941—1945

西暦	暦年	項	目
1941	昭和16年	12月	日本海軍が真珠湾を攻撃し日米戦争がはじまる
		7日	日米戦争勃発直後合衆国官憲が日本人指導者と沿岸漁業に従事する漁師1,300名を「危険な敵性外国人」として検挙拘引
		7日	カナダ政府も日本にたいし宣戦を布告し国家の安全を脅かすと判断される38名の日本人を検挙拘引
1942	昭和17年	1月	合衆国連邦議会のカリフォルニア州選出議員たちが日本人の強制立ち退きを要請 ペルー政府は日本と国交を断絶し、在留日本人のアメリカ合衆国への強制移送を実行
		29日	ブラジル政府は枢軸国独伊日との国交を断絶し日本大使館および領事館を閉鎖
		2月11日	ブラジル政府は枢軸国人の経済活動ならびに利敵行為を防止すると同時に戦災賠償の担保設置を目的とする敵性国資産の凍結令を施行
		19日	ルーズベルト大統領が行政命令9066号に署名して強制立ち退き地域を明示しその地域から日本人を移動させる権限を陸軍に与える
		20日	合衆国における日本人の集団立ち退き実施の責任を西部防衛地区の司令官デウィット将軍に委託
		24日	カナダ政府も内閣令により法務大臣に「防衛地域」から日系人を立ち退かせる権限を付与
		3月2日	デウィット将軍はカリフォルニア州の西半分、オレゴン、ワシントン、アリゾナ州の南半分を第一軍事地域と定めることを布告
		4日	カナダ政府は防衛地域からの日系人の立ち退き実施を決定
		18日	ルーズベルト大統領は戦時転住局 (War Relocation Authority) を設立し立退者を収容する施設の建設とその管理を委託
		24日	デウィット将軍の布告によりアメリカ市民の二世を含む日本人家族全員の午後8時から翌日の午前6時までの外出を禁止
		30日	公共の場所に軍事地域からの「民間人立ち退き命令」が公布され11万人に及ぶ日本人と家族の強制立ち退きが始まる
		5月	メキシコ政府が日本に宣戦布告
		6月	ミッドウェイ海戦で日本海軍が敗退
1943	昭和18年	1月14日～24日	米英首脳がカサブランカで会談し主要枢軸国が無条件降伏するまで戦闘を継続することを宣言 スティムソン陸軍長官が志願兵による二世戦闘部隊編成計画を発表
		5月	合衆国政府が戦時動員局を設置 日本で中学生以上の学生の動員(学徒動員)がはじまる
		7月	ブラジル政府が海岸地方在住枢軸国民の24時間以内の立ち退き命令を発する
		8月	ハワイで編成された二世部隊「第100大隊」がヨーロッパの戦場に向け出発し、北アフリカのオランに上陸後第5軍団の第34師団に編入される
		9月	米英軍がイタリアの本土に上陸 第100大隊の二世兵士はオランを出発してイタリアへ向かい翌年6月までの9ヵ月間イタリアの戦場で戦闘に参加
		10月	連合国政府はモスクワで外相会談を開催しモスクワ宣言を発表
		11月	米英ソ首脳がテヘランで会談 アメリカ合衆国政府は連合国人である中国人の帰化を認める
1944	昭和19年	6月	連合国軍がノルマンディ上陸作戦を遂行
		8月 本年、	8月21日から10月7日にわたって合衆国ダンバートン・オークスで会議が開催され国連憲章が起草される ポリビアのラパス市中心地域に在住する日本人29名がアメリカ合衆国の収容所に移送される
1945	昭和20年	2月	ヤルタで連合国首脳が会談を開催
		3月	アルゼンチン政府が日本に宣戦を布告
		4月	米軍が沖縄に上陸
		4月25日～6月26日	サンフランシスコで国際連合設立総会を開催
		5月7日	ドイツ降伏
		6月	ブラジルは日本にたいし宣戦を布告し、パラグアイも日本に宣戦を布告 連合国政府代表が国際連合憲章に調印
		7月	日本に無条件降伏を迫るポツダム宣言が発表される
		8月はじめ、	広島、長崎に原爆が投下される
8日	ソ連が日本に宣戦を布告		
15日	日本政府はポツダム宣言を受諾		

V期 1946—1999

西暦	暦年	
1946	昭和21年	3月 ブラジルにおいて勝ち・負け組抗争に関連し勝ち組による暗殺がはじまる
1947	昭和22年	10月 日本で海外移住協会が設立される
1951	昭和26年	2月 戦後初の日本汽船「神戸丸」がブラジルのサントス港に到着 9月 合衆国サンフランシスコにおいて対日平和条約が調印される
1952	昭和27年	4月 対日講和条約が発効し日本人の海外移住が再開 10月 戦前の神戸移住教養所を改修した神戸移住幹旋所が開業 12月 戦後の政府渡航費貸付移住の第一陣として「辻梓」によるアマゾン移民が神戸港を出発 合衆国連邦議会が「移民国籍法（ウォーター・マッカラン法）」を制定し、「帰化不能外国人」の一世に帰化権が認められる
1953	昭和28年	7月 ブラジルのマツグロツソ州ドウラードスへ向かう「松原梓」自営開拓農民がサントス港に到着
1954	昭和29年	1月 日本国内の移住業務公的機関として日本海外協会連合会が発足 3月 パラグアイ向け計画移住第一陣がラ・コルメナ移住地に向け出発 8月 琉球政府の計画移民第一陣がボリビアに入植
1955	昭和30年	3月 ボリビア行き移民第一陣「西川移民」が日本を出発 7月 外務省に移住局が設置され「移民」の呼称が「移住者」に改められる 日本で海外移住審議会を内閣の諮問機関として移住促進のため設置 8月 ブラジルのコチア産業組合が関与する青年移民第一陣が日本を出発 9月 日本で移住先国における移住地の造成と耕地分譲を目的とした日本海外移住振興株式会社を設立
1956	昭和31年	3月 横浜移住幹旋所が開所 7月 ドミニカ共和国行きの計画移民第一陣が日本を出発 日本海外移住振興株式会社のブラジル現地法人としてジャミック（JAMIC）移植民有限会社が設立される 8月 日本とボリビアが移住協定を締結 11月 日本で全国農業拓殖協会組合連合会が創設される
1957	昭和32年	5月 ボリビアのサンファン移住地に向け計画移民第一陣が日本を出発
1959	昭和34年	2月 アルゼンチン向けの計画移住第一陣が日本を出発 7月 日本とパラグアイが移住協定を締結
1960	昭和35年	3月 日本で中央農業拓殖基金協会が創設される 8月 パラグアイのピラボ移住地への日本人の入植がはじまる 11月 日本とブラジルが移住協定を締結
1961	昭和36年	8月 ドミニカ共和国への日本人移住者が集団帰国 パラグアイのイグアス移住地への入植がはじまる 12月 日本とアルゼンチンが移住協定を締結
1963	昭和38年	7月 日本海外協会連合会と日本海外移住振興会社が統合し海外移住事業団を設立
1965	昭和40年	5月 外務省に中南米移住局を設置 9月 ブラジルのサンパウロで第1回南米日系人大会が開催される
1968	昭和43年	7月 合衆国で1966年に制定された「移民国籍法」が発効し、1924年以降実施されていた「出身国別移民割当法」が廃止される
1971	昭和46年	5月 神戸港における最後の移民船「ぶらじる丸」が神戸を出航し神戸移住センターが閉鎖
1972	昭和47年	5月 沖縄が日本へ復帰
1973	昭和48年	2月 移住者輸送最終船「につぼん丸」が横浜を出航し、以降移住者輸送に航空機が利用される
1974	昭和49年	8月 海外移住と海外技術協力の2事業団が合併し国際協力事業団が発足
1981	昭和56年	7月 第1回汎アメリカン二世大会をメキシコのメキシコ・シティで開催 合衆国連邦議会が戦時民間人転住と収容に関する公聴会を各地で開催
1988	昭和63年	8月 合衆国連邦議会が「戦時日系人抑留補償法」を制定し大統領が署名 9月 カナダ政府が戦時中の日系人抑留の不当性を認める
1990	平成2年	6月 日本政府が出入国管理および難民認定法を改正し日系人の日本における就労を緩和
1991	平成3年	8月 東京に日系人雇用サービスセンターが開設される
1992	平成4年	10月 日本政府労働省がブラジル・サンパウロに日伯雇用サービスセンターを開設
1999	平成11年	6月 ペルーおよびボリビア日系社会が移住100周年を祝う

(阪田 安雄)

第Ⅱ章

われら新世界 に参加す

Toil in the Soil !!

日本人海外移住の文明史的意義

「われら新世界に参加す」という表現は、1978年6月、サンパウロで開催されたブラジル移住70周年国際シンポジウムの基調講演につけられた演題である。命名者は当時の国立民族学博物館長、梅棹忠夫氏である。

梅棹氏は、ブラジルにおけるドイツ移民150年記念の基本理念として掲げられたテーマ「われらはこの地を信じてきた」に対し、日本移民の文明史的意味を問い、「われら新世界に参加す」という発想を得た。日本人移住者は新世界のお客でもなければ侵入者でもない。むしろ、新しい文明の形成に重要な役割を果たした参加者である、と。日本移民を開拓者の集団あるいは出稼ぎ人の集団であるとする通念や、人べらし政策の犠牲となった「棄民」であるという認識とは別の視角から、すなわち大きな人類史の中で日本人移住者とは何であったかを総体として問題にし、文明形成への参加者として位置づけたのである。

「われら新世界に参加す」はブラジル日本移民史料館のテーマでもあるが、本館の基本理念としても採用されている。たしかに新世界を広く見渡すと、日本移民の置かれた状況は北米と南米ではかなり異なっている。また、時代によっても、たとえば戦前・戦中・戦後と分けてみても、移住先の社会による日本人や日系人への態度は大きく変遷している。しかし、開拓の苦難や人種的差別、あるいは強制収容や内部抗争にもかかわらず、日本人が個人や家族として、さらには社会集団を形成して、なりわい(生業)や教育・文化をとおして文明形成に一役かってきた事実は厳然として存在する。

そこでわれわれとしては、現地の文明形成に参加した日本人とはどのような人びとであり、なぜ移住を決意し、どんなところに住み、いかなる貢献をしたのかを問うてみる必要がある。それを考えるために、各展示コーナーの副題は疑問形になっているのである。(中牧 弘允)



35. われら新世界に参加すコーナー展示風景

第Ⅱ章 われら新世界に参加す

移住の背景—なぜ海外へ行ったのか

故郷を離れるきっかけ

日本人が海外出稼ぎあるいは移住を決心するようになった動機や理由は、個人、時代、それに地域によって大きく異なっている。ハワイあるいはアメリカ出稼ぎがはじまった1880年代後半から1890年代前半では、海外の出稼地で得られる高賃金、または有利な労働条件などを書き記す、親族、友人からの手紙による、いわゆる「口伝え」が、海外出稼ぎを決心する重要な理由となっていた。その他、地方新聞に掲載された、その地方出身者の海外出稼地での成功物語、あるいは故郷に錦を飾って帰国した成功者の建てた洋風の家などは、若者たちを奮立たせた理由となった。

(阪田 安雄)



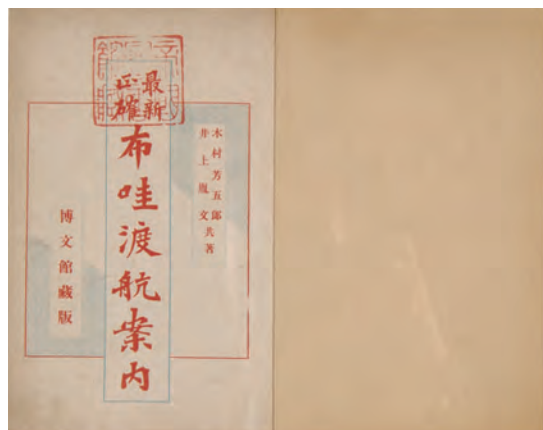
36. 移住奨励ポスター 大正末 複製



37. 移住奨励新聞広告 1934年 複製



38. 移住奨励ポスター 1963～1964年 複製



39. 「布哇渡航案内」1904年 複製

この時期に「渡航案内」は数多く出版されたが、ハワイへの渡航希望者だけを対象とする「ハワイ渡航案内」の数は比較的少なかった。これはその一つである



40. 移住地案内 1966年
ブラジル パラー州トメアス—

呼び寄せ

移民県、たとえば広島県などから、北アメリカや南アメリカへ移住の流れが途絶えることなく継続した重要な要因は、「呼び寄せ」といわれる現象である。これらの地域から最初にハワイ諸島や合衆国本土西海岸へ出稼ぎに赴いた人たちは、ほとんどが若い独身男性であり、海外で稼いで蓄えた金を、郷里で待っている家族へ送り、彼らの生活を潤わせる努力をした。『広島県統計書』などに報告されている統計は、これら海外からの送金が、家族の借金の返済だけに使われたのではなく、送金総額の4分の1は日本で貯蓄され、他の4分の1は、子弟の教育を含む家族の生活改善の目的に使用されていたことを明示している。さらに、故国日本への帰国を延期して、ハワイや合衆国西海岸で借地農業などを始めて、出稼地に生活基盤を築く決心を固めた出稼人たちは、日本に残してきた親族を呼び寄せて家族として協力することを試みた。

これら「呼び寄せ」の対象となった親族は、多くの場合、送金の恩恵により送金者より高い教育を日本で受けていたこと、たとえば多くが中学校を卒業していたことが、ハワイや合衆国などでの日本人移民社会の建設や発展に貢献することになった。南アメリカ諸国での日本人移住社会の経済的、文化的、ならびに政治的発展にも、「呼び寄せ」は不可欠な要因であったことはいうまでもない。(阪田 安雄)



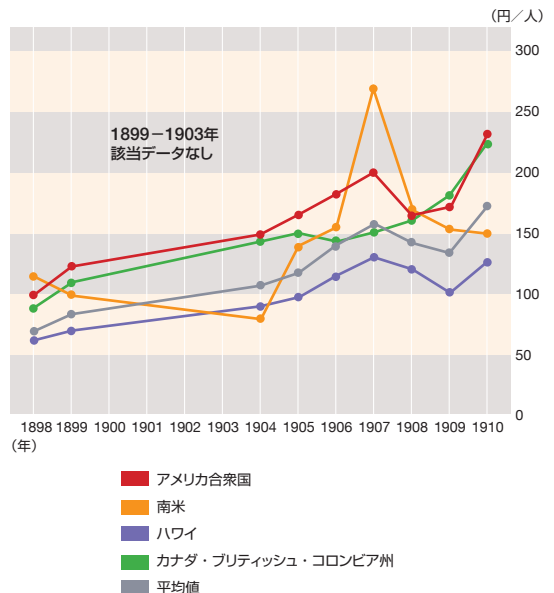
41. 呼び寄せ渡航の際に発行されたパスポート

故郷への送金

ハワイへ赴いた「官約移民」が故郷へ送金した総額がどれくらいになるかに関する統計は残されていないが、『広島県統計書』などに報告されている同県出身の海外出稼者の故郷への年間送金額から推定すると非常な額にのぼることがわかる。また、海外出稼者1人当たりの年間送金額も年々増加している。

1898年から1910年の13年間に、広島県出身の海外出稼者の年間平均送金額は、1898年に約70円であったのが、1910年にはほぼ2.5倍の175円に上昇している。この期間の大工、左官などの「熟練職人」の一年間の平均収入は1898年に約110円、5年後の1903年には約170円、10年後の1908年には約200円であった。農村出身の20歳代後半の若者が、1908年には1年に一人当たり平均して175円を郷里に送金しており、さらに同年に帰国した出稼者は、一人当たり800円強の稼ぎ貯めた金を持ち帰っていることが『広島県統計書』に報告されている。海外出稼者の送金および預金が、出身県や出身村にもたらした恩恵は非常に大きいと評価せざるをえない。

(阪田 安雄)



42. 広島県出身者の主な出稼地域と送金額 (1898～1910年)

阪田 安雄氏作成データ(『広島県統計年鑑』より)に基づく

移住の道のり—どうやって行ったのか

外航旅館（移民宿）

1890年代や1900年代には、日本人が海外出稼ぎや移住を実行するに当たって、横浜、神戸、長崎の波止場周辺にあった外航旅館、いわゆる「移民宿」は、出稼者や移住者が船に乗り込む前に数日宿泊するためだけの「宿泊所」以上の役割を果たしていた。「移民宿」は、「移住斡旋所^{あつせん}」が設立される前に、その役割を代行した海外移住者にとってなくてはならない施設であったといえよう。海外出稼者や移住者のほとんどは、「お上りさん」同様の地方の農村出身者で、どうにか旅券や海外渡航許可証を地方官庁から下付された後も、日本を出発するにあたって必要な、渡航準備、乗船切符の手配、出航手続き、乗船前の検疫検査、必需品の購買などについては何も知らなかった。「移民宿」の番頭や手代たちは、そのような無知な渡航者^{けいあん}にかわって、乗船切符の購買、船室の確保、出航日の確認、検疫検査についての説明、必需品の購買の手伝いなど、諸事万般にわたって面倒をみた。さらに望まれれば、渡航先での宿泊所や桂庵^{けいあん}の紹介なども行なった。海外移住が軌道に乗りはじめた20世紀初頭では、地縁的なつながりで組織化された外航旅館のネットワークは、移住者の不安を除き、海外渡航の流れを円滑にする潤滑油の役目を果たすようになっていた。

(阪田 安雄)



43. 関東大震災後仮建築で営業中の熊本屋旅館 1924年
熊本屋は大正初期に創業した。1980年まで横浜で最後となるのれんを守り続けた



44. 関東大震災後新装された熊本屋旅館 1926年



45. 横浜港周辺の移民宿 明治34(1901)年

移民の七つ道具

移民はパスポートや現金、洗面・化粧道具などの手荷物をはじめ、衣類・食料、食器・炊事道具などを柳行李やトランク、あるいは箱や袋につめて乗船した。風呂敷も重宝した。女性にとってはアクセサリーや裁縫用具が必需品だった。日本語や現地語の辞書、また渡航案内書や医薬品も欠かせなかった。入植者にとっては農機具や大工道具も大切な携帯品だった。謄写版は情報交換に役立った。娯楽のために将棋や花札を持ち込む者もいたが、ラジオやカメラは贅沢品の部類に属した。家族の写真や、天皇・皇后の御真影は象徴的に重要な意味をもち、神札やお守りの類、あるいは仏像や恵比須大黒の像を持参する人もいた。 (中牧 弘允)



46. 空手着



47. 川瀬家の携行品



48. 飯ごう



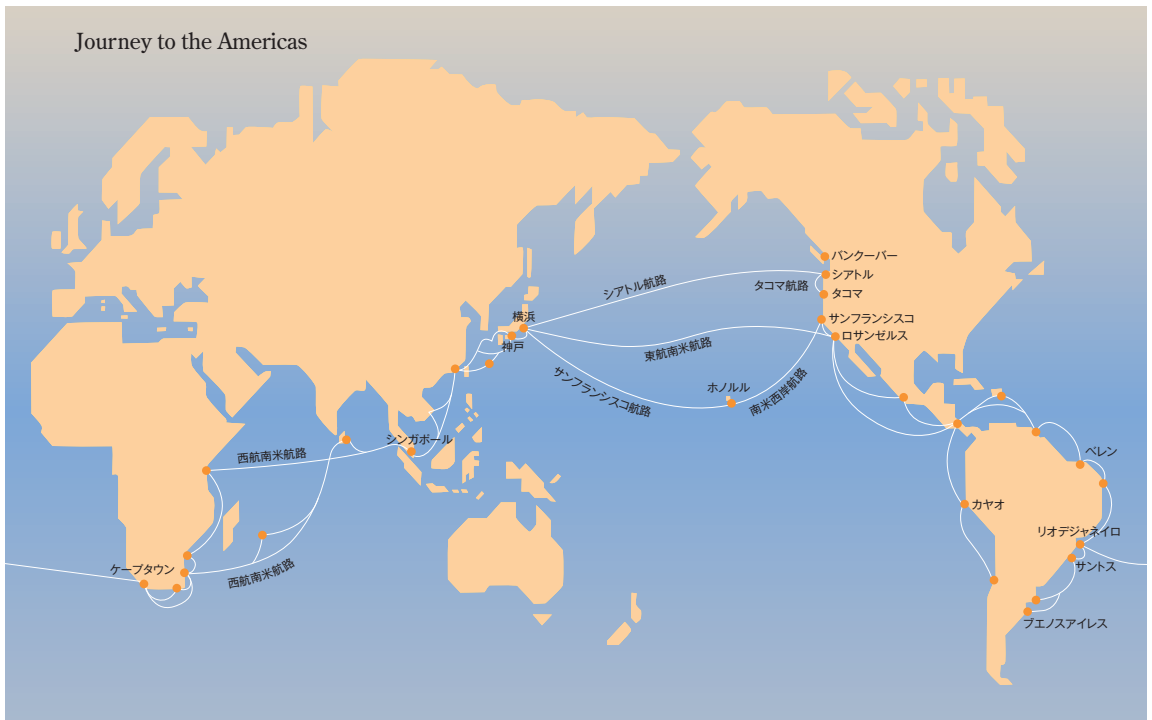
49. 移民の七つ道具コーナー展示風景

移住者たちが渡航に携行した柳行李やスーツケース、木箱や茶箱を展示ケースとみなし、書類やお守り、書籍、生活必需品、大工道具、衣類、化粧品、娯楽品などの携行品を用途・種類別に展示している (城田 愛)

移民船とその航路



50. ぶらじる丸モデルシップ (1/100 縮尺) 商船三井蔵
この模型は、大阪商船の二代目ぶらじる丸である。1954年に完工し、同年7月、ブラジルへ移住者600余名を乗せて神戸から最初の航海についた。往路は横浜、ロサンゼルス経由でパナマ運河を通過して南米に向かった。復路も同様のルートだったが、後にサンフランシスコやホノルルを加えた。1万212トン。最高速力201ノット。客室の定員は1等12名、2等68名、3等902名。移民船としての最終航海は1971年であった。



51. 移民船航路図 山田迪生氏監修の原図より作成



52. 検疫所 1900年 ハワイ・ホノルル



HOTEL
HIROSHIMAYA
1632-1634 POST ST.,
San Francisco, Cal.

妻君及び親族御呼寄の向きは前以て御通知被下候はと出来得る
取御便利に取計可申候且つ其に關して御問合の事項有之候は早速御
返事可申候

渡米上陸手續諸官衙領諸懇切迅速に取扱申候

桑港ゴスト街一六三二
電話タエト九四四八 一・ム・エ三七七六

廣島屋ホテル
館主 榊原 岩吉

各依船車御乗込の手續は最も迅速に取扱可申上候
日本行汽船切符其他汽船切符は夫
船強を以て御世話可仕候。尚御通知次第早速御出可申上候
券附はナター街或はクイ・街の電取ラダナ街にて下車僅か
に一丁にて至極御便利に御座候

53. 渡航および上陸の手續きの手助けをする移民宿



54. 移住地へ向かう 1956年 パラグアイ イタプア県フラム



55. 日本短波放送のテキスト
1962年 日本海外協会連合会

移住先の風景—どんなところへ行ったのか

明治時代の官約移民はハワイのサトウキビ耕地に、20世紀前期のブラジル移民の多くはサンパウロ州のコーヒー農場に向けて旅立った。共通点は大規模農場の労働者として移住生活をはじめたことである。19世紀に奴隷制度が南北アメリカ大陸で次第に廃止されていくと、ヨーロッパやアジアから多数の移民が新大陸をめざして移動しはじめた。日本人もそうした歴史の流れに巻き込まれ、故郷を後にした。行き先はもっぱら大規模農場や未開の大地であった。初期移民は出稼ぎの農業従事者が圧倒的に多く、漁場や工場をめざしたり、商業や知的職業を夢見たりする人たちは少数派に属した。

ハワイや北米西海岸では、契約労働の後、町に出て商売や製造業に従事する人びとが跡を絶たなかった。また蓄財の後、農場の経営にのりだす者も少なくなかった。「呼び寄せ」で移住する者はそのため農村ばかりでなく、都市にも向かった。

かたや農業移住は、その後とくに南米では、契約労働から定住をめざす殖民農業へと変わっていった。人跡未踏の奥地を切り拓いたり、なじみのない熱帯農業にも挑んだ。サンパウロ州奥地のアリアンサ植民地は前者の一例で、「コーヒーより人をつくれ」を合い言葉に開拓にいそしんだ。後者の例としては高等拓殖学校生(高拓生)によるヴィラ・アマゾニアの開拓や、トメアスー植民地(旧アカラ植民地)のコショウ栽培があげられる。

戦後、移住が再開されると、ブラジルをはじめ、ドミニカ共和国、ボリビア、パラグアイ、アルゼンチンなどにも日本人移住地が建設されていった。パラグアイのイグアス移住地もそのひとつで、1960年に海外移住事業団によって購入され、入植は1961年から始まった。(中牧 弘允)



56. 移住地の表示



57 イグアス移住地模型 1/5000縮尺 2002年7月現在



58. 大型三面マルチ映像の一画面



59. 大型三面マルチ映像の一画面

◆情報展示としての大型マルチ画面システム

本展示システムでは大型マルチ画面システムを高いパフォーマンスで実現している。大型マルチ画面システムは臨場感にすぐれ、3Dでなくても相当程度の仮想体験が得られる。本展示では新世界における広大な大地や自然、農場等を表現して、観覧者のイメージを膨らませる支援となることを目標としている。 (山本 匡・福田 直毅)

移住者のなりわい—どんな仕事についたのか

日本移民は当初、サトウキビ農園やコーヒー農園で契約労働に従事したが、独立農をめざしたり、都市に出て商業やサービス業、あるいは製造業や工業に転じたりして、職業は多様化していった。また、医師や教師、宗教家や弁護士などの専門家も移住の比較的早い段階から存在した。一世の特徴としては、職業の選択肢を日本人社会のなかで広げていく傾向がみられた。また、移住先国や時代によっては特定の職業に日本人が目立つようにもなった。たとえば、戦後のアメリカにおける庭園業、アルゼンチンにおける^{かき}花卉栽培や洗濯業などである。

アメリカ大陸に移住した日本人はとりわけ農業の諸分野に挑戦し、さまざまな貢献をした。換金作物としては野菜、果実、コーヒー、綿花、大豆、米、花卉などの栽培に従事し、汗水をたらず労働をいとわなかった。また熱帯農業にも果敢にいどみ、ジュート（黄麻）栽培やコショウ栽培にめざましい成果をあげた。

展示ではブラジルを例にとり、コーヒー、綿花、コショウの栽培と野菜市場をとりあげている。コーヒー豆は「緑の金」とよばれ、サンパウロ州を中心に19世紀後半からブラジルの主要産業となり、日本人も農園労働者（コロノ）として働いた。とくにコーヒー豆の自動収穫機を開発した日本人の貢献は注目に値する。日本人による綿花栽培はパラナ州北部で盛んとなり、1950年代に全盛期をむかえた。白色の綿花は「白い金」とよばれている。他方、コショウ（ピメンタ・ド・レイノ）はアマゾンの入植地トメアスーの特産物となった。その苗木は1933年の渡航の途次、たまたま寄港地シンガポールで入手したものである。そしてコショウの黒い実は「黒いダイヤ」と称されるまでになった。また、ブラジルでは日本人のおかげで野菜が豊富に食べられるようになったといわれるほど、その評価は高い。

北米では農業の他にも漁業や製材業、あるいは鉄道敷設に初期の出稼ぎ移住者は従事した。なかでも英領カナダのフレーザー河におけるサケ漁や缶詰工場の季節労働には和歌山県三尾村出身者が多数かわり、三尾村は「アメリカ村」の通称でよく知られている。

さて、日本人は移住先でも日本的な食生活を維持しようとした。そのため味噌や醤油の醸造業、豆腐や和菓子の製造、そして日本酒の醸造など食品加工業が発達した。また、主に日本人相手に生活関連商品を扱う商店が「日本人町」に軒を連ねた。そのなかでも「^{よろずや}萬屋」はもっとも重要なもののひとつであり、合衆国オレゴン州フッドリバーの安井兄弟の雑貨店はその典型的な例である。

ところで、日本人は朝から晩まで働くだけでなく、キリスト教の安息日である日曜日にまで労働に精を出した。このことに対し、北米でも南米でも、しばしば非難の声があがった。他方、ブラジルでは、勤勉で実直な日本人は「ジャポネス・ガラランチード（信用できる日本人）」との評価も得ている。

（中牧 弘允）



60. フォイセ
日本のナタとマサカリを兼ねる道具で、原始林を開拓する際に最初に使うもので、たいへん仕事がかどり重宝した



61. エンシャータ
日本の鍬と異なり土を起す道具ではなく、草を取るための除草鍬。刃を寝かして引くようにして使う



62. ラステーロ
コーヒーの木からちぎったコーヒーを木の葉とともに集めるもので、先のところが丸くなっていることにより、土を起こさない工夫が凝らされている



63. ベネイラ
コーヒーの実を木の葉や小石と選り分けるために、このふるいにかけ、空に舞い上げることで分別した（小嶋 茂）



64. コーヒー豆の自動収穫機



65. 綿花栽培コーナー展示風景



66. プランタデイラ (播種機)



67. 開墾風景 ブラジル 半田知雄画
(油彩 1065 × 880)



68. コショウ栽培コーナー展示風景

なりわい万華鏡



69. トラクターを使う農業 コロンビア



70. 理髪業 ペルー・リマ 1924年



71. 移動写真屋 1920年代
アメリカ カリフォルニア州サンフランシスコ



72. 巡回シネマ屋 ブラジル サンパウロ州バストス

よろず
萬 屋



73. 萬屋コーナー展示風景



74. 萬屋で使われていた求人広告
この広告は、萬屋が桂庵の役割も果たしていたことを示している



75. 萬屋で使われていたポスター



移住者の家庭 —どんな暮らしをしたのか

日本移民の暮らしを衣食住に限ったとしても、その多様性を一概にまとめることはむずかしい。とはいえ、ひとつの傾向を示唆することはできる。たとえば衣について言えば、ホノルルの日本人婦人会の記念写真を見ると、1916年の発足時にはすべて和服であったものが、数年後には洋装もちらほら混じるようになり、さらには服装改善運動が功を奏して、1930年代になると完全に洋装化している。仕事着でも、サトウキビ耕地の労働にあわせて和服の袖をすぼめたり、手甲・脚半の伝統を活用したりする工夫が見られた。つまり、移住者の暮らしは日本的な伝統をのこしながらも、しだいに現地の生活様式に適應していったのである。住についても、和風建築様式にこだわった痕跡はブラジルの移住地で今でも散見される。

食生活においても、現地適應への変化は日本の習慣を維持しながら行われた。一方で和食用の鍋釜や箸の使用は持続し、丸いちゃぶ台も作られたが、他方では料理にオープンをもちい、椅子式の四角いテーブルに座り、ナイフやフォークを使う食事が一般化した。食材も日本とはかけ離れていたため、日本の味の代用品を求めて苦心することもあった。

住生活について言えば、室内でも靴を脱がず、寝室でベッドに寝る習慣は、日本とはおおきく異なっていた。他方、ハワイではビーチサンダルを玄関で脱いだり、座布団を床に並べたりする習慣があり、これは日本移民が持ちこんだ習俗だといわれている。

(中牧 弘允)



77. 野外での洗濯 ポリビア サンタクルス県サンファン



78. 散髪
ブラジル
パラナ州



79. 日本に向かう
一時帰国の
記念に
1959年
ブラジル
サンパウロ州
サンパウロ



76. 移住者の家庭生活コーナー展示風景



80. 食卓につどう
1970年
ブラジル パラー州トメアスー

移住者のきずな—どのようなコミュニティをつくったのか

日本人会

日本人が移住先でつくる団体のなかで、もっとも基本的で重要なものは「日本人会」であった。日本人会はピクニックや運動会を催す単なる親睦団体ではなく、合衆国では1907年の「紳士協約」締結後、領事館から委譲されて「居住証明書」などの発行業務を代行した。また、紀元節や天長節を祝賀する会、あるいは日本練習艦隊の歓迎会などの「国家的」な行事を主宰した。

日本人会のほかにも県人会、村人会、同船会、婦人会、仏教会、教会、学校、病院、農業組合、商工会議所、あるいは慈善や趣味の会など、さまざまな団体がつくられた。それらは、出自、性差、宗教、職業などを共有すると同時に、ひろくは日本語、日本文化への帰属意識に基づく集団であり、日本人が移住先で定着する際に、それぞれ重要な役割を果たした。

日本人がもっとも力を入れた活動のひとつは子弟教育だった。日本に帰ったときのことを考え、あるいは日本語から離れていく子弟を目の当たりにして、日本語学校や日本人学校を自力で設立した。

仏教会や日系キリスト教会がコミュニティ・センターとして果たした役割もおおきい。仏教会が主催する盆行事は日本人社会の祝祭的雰囲気をかもしだしている。仏教会では日曜学校が開かれ、讃仏歌がうたわれ、仏前結婚式がいとなまれているが、これはキリスト教的適応がなされた結果である。また出雲大社などの神社もハワイやブラジルには建てられている。

以上のような団体のなかで、婦人会の貢献も見逃せない。その主な役目は料理部門を担当することであるが、それ以外にも文化からスポーツにいたるまで多彩な活動を繰り広げ、女性どうしの絆と親睦を深め合っている。婦人会が主催する成人式や敬老会もある。

ところで、海外において、相互扶助と相互親睦をかねたコミュニティづくりに欠かせない施設はホールである。そこでは新年会や忘年会、歓迎会や送別会、結婚披露宴や追悼法要、盆踊りや民族芸能祭、バザーや展覧会、演芸会や映画会、講演会やセミナー、スポーツやビンゴ、婦人会や敬老会等、さまざまな活動がくりひろげられている。

(中牧 弘允)



81. 在米日本人会の設立決起大会 1908年
アメリカ カリフォルニア州
サンフランシスコ



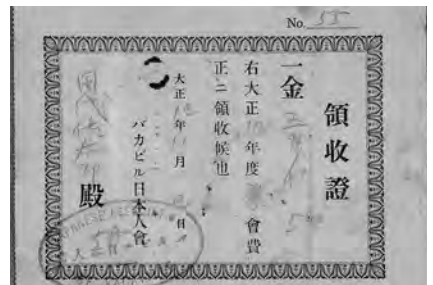
82. 自動車で向かうピクニック 1910年
アメリカ



83. フレスノ日本人会主催天長佳節奉祝記念
1928年 アメリカ カリフォルニア州



85. 和歌山県人会の宴 1938年
ペルー リマ



84. バカビル日本人会会費領収書 1923年
アメリカ カリフォルニア州ヴァッカビル

婦人会



86. 炊き出し用大釜
アメリカ ワシントン州シアトル



87. 婦人会ソフトボール大会・ゲートボール大会の慰労会
1986年 パラグアイ チャベス



88. 婦人会主催の15歳の祝賀(デビュー)
1986年 ブラジル パラー州トメアスー

宗教団体



89. もちつき用石臼
ハワイ州マウイ島



90. オーラ本願寺での集い 1905年 ハワイ



91. 日本人キリスト教会の献堂 1916年
ハワイ州 マウイ島



92. 仏前結婚式
アメリカ オレゴン州
ポートランド

スポーツ・文化活動・娯楽



93. 移住地で使われた野球道具
ユニフォーム(ブラジル)
グローブ(ブラジル)
ボール(ペルー)
バット(アルゼンチン)



94. 各種文芸書
『北米俳句集』アメリカ
『南加文芸選集』1965年~1980年アメリカ
『コロニア万葉集』1980年ブラジル サンパウロ州サンパウロ
『コロニア文学』第1号1960年ブラジル サンパウロ州サンパウロ
『NY文芸』アメリカ

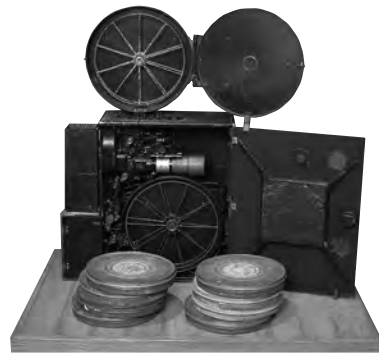
ホール



95. 日本館のどんちょう アメリカ ワシントン州シアトル



96. 蓄音機 ペルー

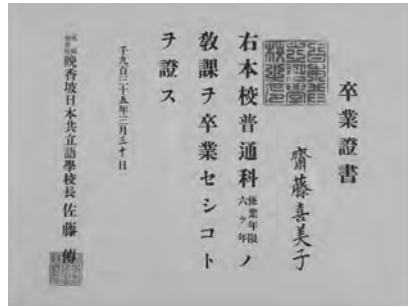


97. 巡回シネマに使用した映写機と映像フィルム
ブラジルパラナ州クリチバ

教 育



98. ポルトガル語訳付き日本語教科書
年代不詳 ブラジル パラナ州クリチバ



99. 卒業証書 1935年
カナダ バンクーバー

日本語新聞



100. ペルー新報社活字セット
ペルー リマ

医療と福祉



101. クリチバ学生連盟が僻地での
巡回診療に使用した顕微鏡
ブラジル パラナ州クリチバ



102. 1939年に落成した旧日本病院
ブラジル サンパウロ州サンパウロ



103. 新築落成と設立3周年記念祝賀時の日本人病院
1899年 ハワイ州オアフ島



104. クアキニ・ホーム 1932年 ハワイ州オアフ島



ホームー・ヤスイさん
(アメリカ在住二世)

<ポートランド在住。ツールレイクでの収容所生活の後、1942年仮釈放許可を得てデンバー大学に入学し医学を学ぶ。父親は岡山県七日市出身。>

わたしの父マスオ・ヤスイは1903年にアメリカに渡って来ました。

彼が16歳の時、母親に「僕はアメリカに行きたい！」としつこく頼み込みアメリカに行く承諾をもらいました。

最初バンクーバーに着いて小さな船に乗りシアトルに着き、そこから列車に乗ってポートランドに到着しました。父は兄であるタイチロウがハチヤホテルで待っているからと聞いていたので、ハチヤホテルでずっと待っていたが何かの間違いで会うことが出来ず、自分でユニオンパシフィックに直接行き働きはじめた。



ゴードン・カドタさん
(カナダ在住二世)

<7歳の時、母と一時帰国。第二次世界大戦勃発によりカナダに残った父親や兄達と離ればなれになる。鳥取に疎開したのち1952年再びカナダに戻る>

日本に帰った時は7歳で、カナダに戻ってくるはずが戦争のために日本にいることになり……

わたしが初めて髪の毛伸ばし始めたら、「お前、それなんだ」と[そのアメリカづらして、日本が負けたと思ってそんなことしてる]って、上級生にぶん殴られたこともありました。



五艘 晋さん
(ブラジル在住一世)

<東京都出身。1959年ブラジルへ移住。さまざまな職業遍歴の後、1980年から草サッカー場を経営。『アマゾン日本人移住60年史』に編集協力>

ベレンから離れたらね、もう、森の山小屋の中でハンモックに寝てね、で、狩りをしながら生活している人間がいっぱい居ったですよ。

それがまたたく間にね、要するに農業文明に入ってきたわけですよ、それからまたたく間にね工業文明が訪れてきたんですよ。グローバリゼーションでね、ベレンも情報文明だとかなんとか言ってますけど、僕はここへ来たお陰で、人類の歴史のね、1千年位にわたるね、あの一体験をしちゃったんですよ。



小池 七郎さん
(アルゼンチン在住一世)

<1907年水戸市生まれ。1920年代にアルゼンチンへ移住した一世>

6年間で仕事休んだのはたった1日です。そのくらい頑張りました。結婚は1936年です。10年間で3,600ペソ貯めました。これはおそらく記録でしょう。

在亜邦人の向上発展、これに一つ全力を尽くそうと思い、日本語学校を作ったのも私たちです。



河合 武夫さん
(ブラジル在住一世)

<三重県出身。サンパウロ在住。1925年ブラジルに渡る。マッケンジー工科大学卒業。コチア産業組合勤務。サンパウロ人文科学研究所創立役員>

太平洋戦争が終わったのが1945年でしょ。ほとんど絶対多数は、日本が負けたとは信じなかった。いわゆる勝ち組が絶対多かったです。

軍票と言いますか、その札束がね日本が負けただらだになってしもうたわけでしょ。その軍票がそういう架空の日本の戦勝に必要なだったということも大きな原因だったと思います。



幸地 広さん
(ボリビア在住一世)

<1932年沖縄県生まれ。1954年単身でボリビアへ渡り、オキナワ移住地に暮らす一世。出身地嘉手名の米軍基地と同じぐらいの670ヘクタールの農地に大豆栽培や牧場を営んでいる>

植え付け種まきをしてしばらくするとですね、うるま病という病気が発生しまして、400名のうち300名ぐらいが寝込んだんじゃないですか。で、まあわずかの期間で15名がなくなったわけです。

ペルーの大使館からですね、お二人が見えまして、わたしどもと懇談会をしたんですが、ぼくらが持っているのは、身分証明ということですね、琉球住民とか、ですね、日本国民じゃないですよ、「ああ、かわいそうだが我々お手伝いできません」といわれてですね、みんながっかりしました。沖縄出るときはですね「お前ら沖縄一步でたら日本人として見てくれるから優遇される」とか「行き先々では日本人として見てくれるだろうからまあ、心配せんで行きなさい」という風に言われてきましたので、大きな壁にぶつかりましたなという思いがしました。



大戸 甲子雄さん
(ブラジル在住一世)

<埼玉県羽生市出身。1927年3歳の時に両親及び兄弟姉妹とともにアリアンサ移住地(第2アリアンサ)へ入植>

来てすぐ目についたのが尾長猿です。山で尾長猿が50も100も来てキャーキャーと騒いで、それが怖くて昼も夜もおちおち寝られないような状態でした。

慣れないところへ来て、それこそ塩汁を吸って味噌もないんだからそういう苦労してきて、それで親たちがすぐに学校を建て、あるいは病院を建て、そうしたあれでもって苦労してくださったのをいま振り返って見ますと本当によくやってくれたと……



ジョージ・ヒデオ・タカバヤシさん
(アメリカ・ハワイ在住二世)

<長く軍籍にあり、引退後ハワイ日系人協会会長を二度つとめるなど、日系社会のまとめ役として活躍>

中隊長から命令が下って「本部に集まれ」。チャプレンが「君たちをここに集合させていただいたのは今日期日現在みんな除隊だ」って。理由は「君たちは日本人であるから、日本人の血が流れているから。」それでみんな男泣きしましたですよ。



ファン・カズオ・イイダさん
(ペルー在住二世)

<父親は第1回ペルー移民として佐倉丸でペルーの地を踏んだ。ペルー新報社主。ペルー日本人移住史料館長>

新聞がなくなって、日系人同士のニュースがない、じゃ、新聞どうか、って。結局僕はペルー人だから二世、僕の名前によって内務省に願書出したわけですよ。そしたらOKだったわけです。で、ペルー新報の名義人はわたしなんで、現在でもそのままです。

◆情報展示解説としてのシステム解説

証言映像システムは動画対応多元分割システムにデータベースよりマルチメディアデータを供給する新しいオーラルヒストリーの保存・表現装置である。オーラルヒストリーは文物資料及びアーカイブス等による歴史構築に対して、証言者の証言によって歴史を再構築する新たな試みであるが、その保存方法と表現は非常に困難であり印刷物等での表現では十分とは言えない。しかし、「収奪しない資料館」を目指す新しいタイプの資料館・博物館等では、証言映像によるオーラルヒストリーの表現は必須である。

本システムでは、観覧者及び閲覧者が自由にデータベースから移住証言を選択し、それによって動画や現地で採録された音声聞きつつ、テロップ及び日本語解説でそれを確かめることができるように設計されている。証言者の個人データ等も十分にプライバシーに配慮した上で展示される。データ数も追加することが可能であり、このようなオーラルヒストリーのツールは極めて画期的であると言える。なおデータの選択にあたっては耐久性・耐故障性等を考慮して非接触型の操作系が用いられている。

(山本 匡・福田 直毅)

第Ⅲ章

ニッケイ・ライフ・ヒストリー

第Ⅳ章

日本の中のニッケイ・ 世界の中のニッケイ



第Ⅲ章 ニッケイ・ライフ・ヒストリー

ライフ・ヒストリーとは人生の生活の歴史、つまりは個人の生活史である。移民として海外での生活をおくり、あるいはその子弟として生を受け、歴史に個人の足跡を刻んでゆく。それは一人ひとり異なっているが、いくつかの段階を共有しながら歩んでいるとも言える。つまり、誕生、学校、就職、結婚、子育て、退職、老後、そして「大往生」という具合に。展示はそのライフ・ヒストリーを4段階—生まれる、育つ、成人として……、老いる—に分け、主に写真で構成している。

象徴的な展示物は二世の出生証明書のファイルと、六世が誕生したハワイの一族の記念写真である。その間にはさまる数々の写真には個人や兄弟姉妹や夫婦のミクロな生活史が写し出されている。マクロな人類史とは好対照をなすミクロな生活史にも、参加の印はたしかに刻み込まれている。

ところで、一世に苦勞話はつきものである。それが成功物語につながることも多い。そうした物語とは別の筋書きが二世の場合には存在する。

二世が誕生すると明るい話題に家庭がつつまれる。こどもの将来を楽しみにするようになると苦勞が苦勞でなくなるから、不思議なものだ。二世は日本語と現地語の世界ですくすく育ち、やがて学校に通い非日系人の友達もふえる。女の子にとっては15歳の誕生日が一人前の女性としてのデビューとなる。適齢期を迎えた二世はかつては二世どうして結ばれることが多かったが、三世ともなると非日系人とのあいだの婚姻が増加する。

第二次世界大戦中の二世は生まれた国に忠誠を誓い、入隊し、戦地に向かった。合衆国の100大隊や442部隊はその例である。

他方、きびしい労働に明け暮れた一世たちはしだいに年老いて、仕事や社会活動の一線から退いていった。アメリカでは1924年の移住禁止以前に渡航した一世はほとんど姿を消した。 (中牧 弘允)



108. 出生簿 1918～1951年 アメリカ カリフォルニア州 ロサンゼルス



109. 長男誕生 年代不詳 ハワイ カウアイ島



107. ニッケイ・ライフ・ヒストリーコーナー展示風景



110. ひなまつり 1935年
アメリカ オレゴン州ポートランド



111. ほくたちの階段 年代不詳 ペルー



113. 夫婦の談笑 1970年
ブラジル パラー州トメアスー



112. ハネムーンへ旅立つ二人 1954年
アルゼンチン リオ・ネグロ州
バリロチェ



114. 六世が誕生したビッグ・ファミリー ハワイ州マウイ島 撮影：ナガミネ写真館(2002年3月)

ハワイへ移住した一組の夫婦の孫にあたる三世から六世までにおよぶ一族

山口県出身であるこの家族の一世は、第19回官約移民として三池丸で1891年にハワイへ到着した。渡航時、妻は妊娠中で、ハワイに到着した年に二世が生まれた。その二世の長男が、写真のなかでは最高齢の1910年生まれの子の男性(椅子列の右端)である。この三世はキリスト教徒であり、92歳(撮影時)になっても教会に通っている。四世の結婚相手は沖縄系である。そして、六世(椅子列の女児と男児)になると、日本以外にもヨーロッパやアジア、オセアニアからの移民や先住ハワイアンなどにルーツをもっている。一世紀以上を経て、六世代目にはいった日系家族の構成は、エスニック背景も文化的にも多様になってきている。つまり、ハワイのマルチ・エスニック、そして多文化社会をますます反映するようになってきているのである (城田 愛)

第IV章 日本の中のニッケイ・世界の中のニッケイ

地球規模でのヒト、モノ、カネ、情報の移動・交流といったグローバル化の進展に伴い、日本において「日系人」と呼んでいる人たちの存在も世界各地で多様化している。日本から見た日系人と、海外で nikkei と呼ばれるニッケイの人たちには、しばしば微妙な、あるいは大きな違いが見られ、ニッケイは激しく揺れ動いている。

日本の和太鼓も北米では Taiko として新しい息吹が吹き込まれ、nikkei のグループや非日系のグループも出現している。ブラジルのパラナ民族芸能祭では、他のさまざまなエスニックグループの人たちとともに、日系の文化を伝えている。そこでは、一世の持ち込んだ日本文化が端緒となっているものの、ニッケイの人たちによる独自の文化形成が進んでいる。そして今日、日本においてもニッケイの人たちが、その文化を伝えつつある。

(小嶋 茂)



116. カナダ製のワイン樽で作った太鼓
カナダ プリティッシュ・コロンビア州
バンクーバー



115. 日本の中のニッケイ・世界の中のニッケイコーナー展示風景



117. パーランクーとばち
ポリビアのコロニア・オキナワに移住した一世が作った
パーランクー（旧盆を祝うエイサーの踊りなどで使う太鼓）
と、婦人会が作ったばち
(城田 愛)





サンパウロ仙台七夕祭
 ブラジル サンパウロ州
 サンパウロ



パウエル祭 カナダ
 プリティッシュ・コロンビア州
 バンクーバー



パラナ民族芸能祭
 ブラジル
 パラナ州クリチバ



二世ウィーク
 アメリカ カリフォルニア州
 ロサンゼルス

118. 各地で行われているニッケイのまつりのポスター



サクラメント太鼓団
 アメリカ カリフォルニア州
 サクラメント

二世ウィーク

ポートランドタイコ
 アメリカ オレゴン州
 ポートランド

二世ウィーク

トーフ フェスティバル

119. マツリやタイコのTシャツ

外国文化になった日本のマツリ



120. マツリ展展示風景

日本から移住者が渡ったブラジル、カナダ、アメリカといった国々で、広く現地社会に受け入れられている日本の祭があります。これらの祭が日本人によって移住地で行われた当初の意図や、それらが歳月とともにどのように変容していったかをたどり、そのプロセスの中に日系人のアイデンティティの問題を探ることを意図した企画展を2004年3月から開催しました。2ヶ月の会期中に約4,000名の方々に見ていただくことができました。色彩鮮やかな資料、太鼓や音楽の迫力、参加する人々の躍動感あふれる映像は、常設展示場とは違った趣でしたが、楽しんでいただきました。

第V章

デジタル移住スペース

第VI章

海外移住資料館への メッセージ

第VII章

来館者ノートから

世界人権宣言(1948)
Universal Declaration

第V章 デジタル移住スペース (情報展示解説)

デジタル移住スペース・未来に向けて

「未来に向けて (新しい天空)」は、現在の移住の世界的状況と近未来における移住の姿を多角的に提示することで、移住を自己の問題として認識することを促し、さらに世界公共性の一つとしての移住概念を紹介する情報装置である。移住によって新しい融合世界が開かれること、誰もが移住者となる可能性があること、人類の移動と新たな社会の建設はグローバルゼーションの本質的な特性であること、その中で国際組織や政府、国家機関、NGO や個人がどのように行動すべきなのか、人類社会の多様性と未来について移住を通じて考える道標としてこれを制作した。移住は現在の国際社会が認める人類の権利でもある。一人ひとりの来館者が人類の移住の未来を自己の問題として体感することを本展示の目的としている。

「未来に向けて (新しい天空)」は多元情報シミュレータであり、移住の未来について多角的なデータを合成し、コンピュータ・シミュレーションで表現している。スクリーン上には移住に関する国際法や人種多様性に関する演説、多様な人間像、移住都市の変貌などが随時データベースから供給されるデータに基づき計算され表現される。文字列は世界人権宣言から採られている。スクリーン上に複数成長する幾何オブジェクトがウィンドウとして発生し、その形状変化で移住社会の生成と発展、人類の多様性の発現、移住都市の成長過程が表現される。それらの幾何ウィンドウ上に写し出されるさまざまな動画像によって都市や人間、文明の営みと変容が表される。海外で活躍する日系人も既に五世や六世となり、それぞれの国や地域で新しい国民を形成している。人間の顔を表現する球形のオブジェクトは人類の多様性の発現を表している。また、来館者の姿が未来の移住者として動画像に取り込まれることで自分の姿を移住者の中に発見することができる。

本システムでは一回ごとにローディングされて特殊透過型ブラックスクリーン上にシミュレーション画像が投影される。3D 特殊音響装置によって新作されたテーマ曲「新しい天空」が画像と同期して流される。音響の三次元の膨らみも体感できる。

(山本 匡・福田 直毅)



122. デジタル移住スペース展示風景

◆情報展示解説としてのシステム解説

海外移住資料館には、最先端コンピュータ技術を用いて移住の人類学的広がりや歴史、文化、社会、未来を多角的に表現する統合情報表現システムが実現されている。海外移住資料館における情報展示および情報表現システムの構築においては、[1] 収奪しない資料館であること、[2] 世界の中の移住を表現すること、[3] 学術デジタル資料の保存・処理と表現および個別検索を可能とすること、[4] 世界の日系人および日系移民施設とのネットワークによる連携を可能とすること、[5] 世界の移住情報を共有し、世界の移住研究に貢献できること、を目標とした。新しい公共情報空間を構築することで、移住への理解の支援となることを企図している。

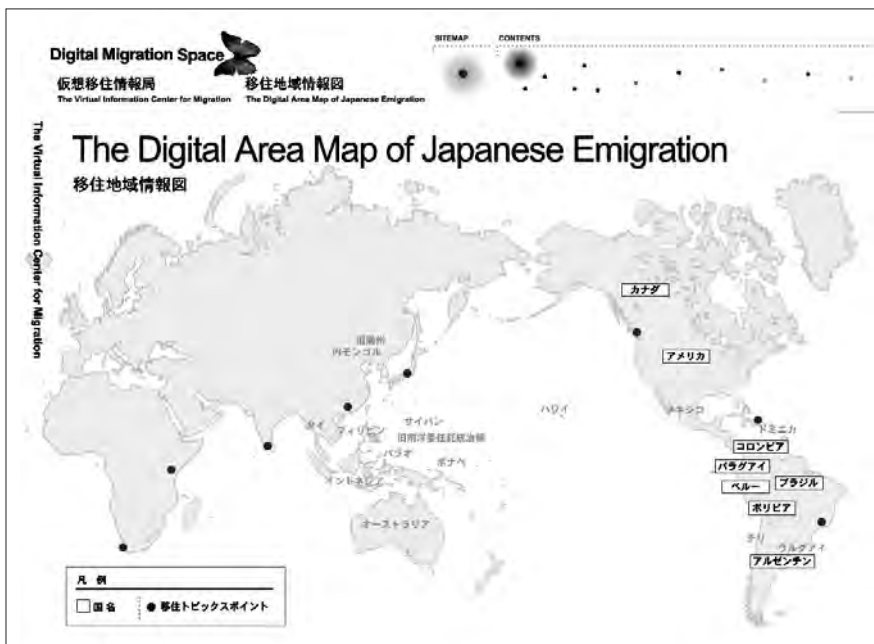
本移住情報表現システムの技術的な特徴は、(1) 情報設計および情報処理過程から情報表現に至る一貫情報処理・表現システムとして設計したこと、(2) マルチメディア・データを中心とした全てのデータがサーバから供給される中央管理型のクライアント・サーバシステムを用いた情報表現システムであること、(3) インターネット上の仮想空間と現実展示空間の一体化を目標として設計された仮想公共情報空間であることの三点に集約される。本システムは完全デジタル化統合情報表現システムであり、汎用技術を用いて特殊情報システムの設計と実装を行った点に特徴がある。(山本 匡・福田 直毅)

デジタル移住システム

デジタル移住システム (Digital Migration System) では、デジタル移住スペースに設置される6台のコンピュータ端末によって移住に関する多様なマルチメディア・データが個別に検索可能となっている。新しい検索方法として、青いモルフォ蝶のシンボル・オブジェクトを追いながら検索を行う人間工学的にも斬新で刺激的なデザインを開発した。利用者には青いモルフォ蝶を追いかけて様々な仕掛けを発見してほしい。利用者の各々の関心に従って、地理情報システム上に表現される地理データや歴史データをデータベースから検索でき、移住の航路や移住先の都市等を詳細に知ることができる。

特に展示スペースの関係で展示できなかった資料や収蔵資料、画像資料、個別に十分な解説が必要な資料等がデータベース化され検索可能となっている。北米や中南米に限らず戦前・戦後を通じてアジア・太平洋に移住した日本人の記録や、「引き揚げ」や再移住、日本統治下での強制的な移動を伴う移住についても資料に基づき随時追加される予定である。最新の移住トピックスから、移住者一人ひとりの歴史と思いを利用者一人ひとりが感じとることができるように切に願っている。

デジタル移住システムは世界に開かれたシステムであり、世界の日系人とのネットワークを通じた連帯が可能となる。世界の日系人の仮想空間での「心のふるさと」となることを希望すると同時に一人ひとりの情報交換の場となることを期待する。移住情報検索システムとともに日本の移住資料のデジタル保存と学術的な整理と表現をネットワーク上に提供することができる。移住データベースやデジタル移住スペースの情報発信によって、世界の移住・移民研究施設と連携する。本システムはセキュリティおよび基本的人権に配慮しつつ、自由に利用者がデータ検索可能でかつインターネットに接続できるように設計されている。(山本 匡・福田 直毅)



123. デジタル移住スペースのコンピュータ端末の一画面

メッセージボード

日本において私たちは日本語で「日系人」という表現を使い、日系アメリカ人、日系ブラジル人、日系ペルー人などという呼び方をします。しかし、日系人の定義はさまざまに学術的にもまだ確定されたものは存在しない。その一方で、私たちは漠然と日系人を理解しており、具体的なイメージも抱いている。

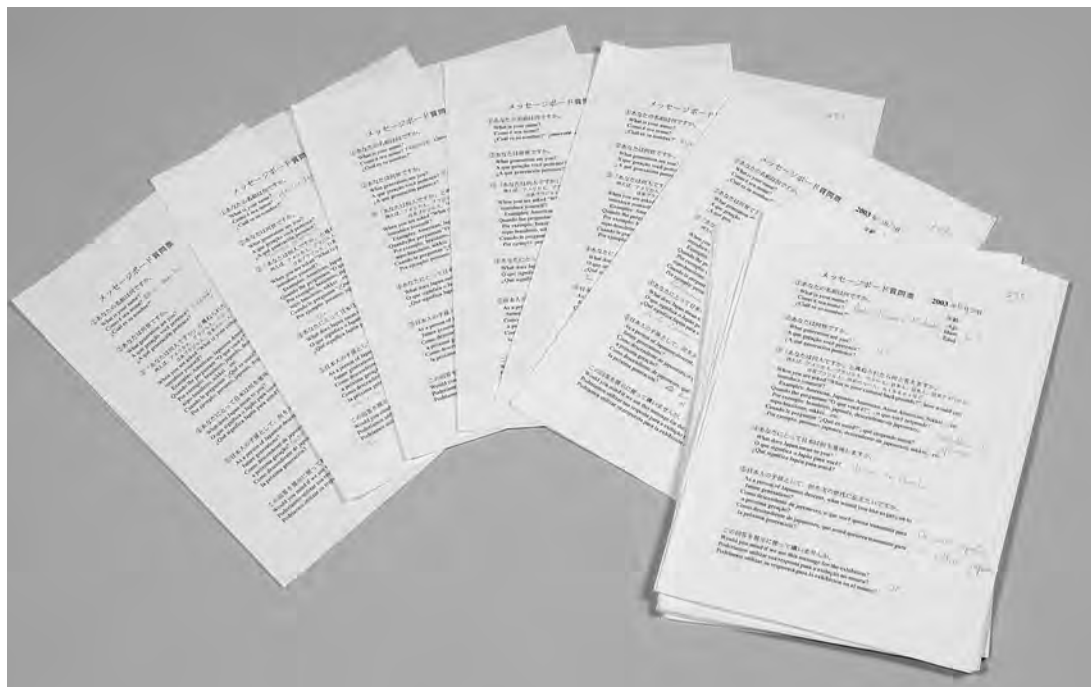
しかし当の「日系人」は日本との関わりで自分自身のことをどのように表現し捉えているのか。その問いに対する材料を提供してくれるのが、メッセージボードのアンケートである。アンケートの回答（一部ビデオ録画）は、資料収集時に会った日系人や当資料館来館者から回収したものである。

「『あなたは何人ですか』とたずねられたら何と答えますか」。アメリカ人、日系アメリカ人、ニッケイ、日本人を先祖にもつアメリカ人…… 同じ国においても、そこにはさまざまな回答が見られる。日系人といっても決して一様ではなく、その受け止め方は多様であることが分かる。

(小嶋 茂)



124. メッセージボードコーナー展示風景



125. 日系人が記入した多数のメッセージ

第Ⅵ章 海外移住資料館へのメッセージ

セリア・オオイ 氏
ブラジル日本移民史料館長

おめでとう海外移住資料館

海外移住資料館のオープニングをたいへん待ち遠しくうれしい気持ちで拝見しました。それはあたかも新しい兄弟の誕生に立ち合うかのようにでした。そして、資料館が元気で成長することを祈りたいと思います。なぜなら資料館は私たちみんなの生活、というよりも私たちファミリーにとって、大切な存在だからです。

横浜の資料館は、ブラジル日本移民史料館と同様に、よりよい生活条件を求めて海外へと自発的に渡った日本人について、紹介しています。その大多数は錦衣帰郷を夢見て、ほとんどの者は日本を永遠にあとにしようとは思っていませんでした。しかしまた、この夢を実現することができた者はごくわずかでした。実際には、日本人移住者たちは新しい国々で根を生やし、それらの国々の文化に彼らの習慣やならわしを取り入れていったのです。

海外移住資料館はそうした移住者の冒険物語を、日本に留まった人たちに語っており、海外にいる日本人の子孫である私たちにとっては、それは先祖との絆を再び築いていくことなのです。それと同時に、ブラジル日本移民史料館にとっては、海外移住資料館がブラジル移住に関する新しい研究の可能性を広げる、重要な照会先であることを意味しています。これは、結局のところ、グローバル化とともにますます今日的な課題です。

こうしたことから、私たちの新しい兄弟の1周年の誕生日をお祝いするとともに、長生きをして皆さんの夢が実現することを願っています。

(原文ポルトガル語から和訳)

宮尾 進 氏
ブラジル・サンパウロ人文科学研究所長

早いもので、海外移住資料館が開館してからすでに1年の月日がたったと聞きます。

開館後の様子は詳しくは耳に入っておりませんが、1年間で2万人程の入館者があったとも聞いておりますが、できればもっともっとたくさんの人々に参観してもらいたいものと、海外にある私たちは熱望しております。なぜならば、この資料館は日本国内唯一の国立の移住資料館であり、海外にある私たち250万日系人が、それぞれの国の国造りに参加し、今日ある姿を物語ってくれる唯一のものであるからです。

3年前の設立準備会議に出席させていただいた折にも申し上げましたように、日本国内において長い歴史がある「海外移住」は教科書でもほとんどふれられることなく、一般国民の間からは忘れ去られた存在でありました。しかし、グローバル化といわれる現世界において、私たちはむしろ、日本人国際化のさきがけの役割をも果たしてきたものと自負しており、このことをせめて、貴資料館を通じ少しでも多くの日本人たちに、知っていただきたいと、深く願っております。

さらに「友の会」など有料会員制度を作り、各種情報手段を通じ、しだいに会員の広がりを増していくことによって、海外に多くの日系人があることへの関心も高められるのではないかと、期待されます。

それとともに、私たち研究者としては、情報社会の今日、インターネットを通じ移住に関する各種資料を交換できるような体制をお互いに確立していきたいと望んでおります。

関係者の皆さまの今後のご健闘をお祈りいたします。

二宮 正人 氏
ブラジル日本移民史料館運営委員長

ブラジル日本移民史料館は、1978年にオープンしましたが、その建設にはブラジル日系社会が一丸となって努力を結集したほか、国際協力事業団（現：国際協力機構）をはじめとする日本側の皆様に物心両面で筆舌に尽くし難いご協力を賜りました。

私は同史料館運営委員長として、このたび横浜に完成した海外移住資料館につき、構想段階より意見を求められ、企画段階以降も種々の作業に参加し、ブラジルにおける資料収集については、個人的にも協力させていただきました。ブラジル日系社会の宝物とも言うべき貴重な文物のいくつかが、神戸とならぶ移住発祥の地である横浜において陳列され、多くの人々に先駆者の苦勞を偲んでいただけることは、望外の喜びです。

海外移住資料館におかれましては、今後もブラジルやアメリカ、ペルー等の日本移民の記憶を保存する目的で設立されたいくつかの博物館との連携の絆を強く保ち、互いに共通の目的達成のための協力をご配慮下さい。

また、今後は海外移住資料館が展示のみならず、移民に関する諸問題の代表的な研究の拠点として、シンポジウム、セミナー等の各種研究会を催され、それらの結果や研究の成果を発表するための雑誌、論文集等を出版することによって、移民研究の主要な軸の役割を担っていただくことを願います次第です。

さらには、80年代後半には、所謂「出稼ぎ」現象が生じ、今日では35万人以上の中南米日系人コミュニティが日本に存在しており、永住を含む長期滞在が顕著になっています。海外移住資料館におかれましては、今後はこれらの新しい「移民」も視野に入れていただきたいと思います。

ゴードン・カドタ 氏
カナダ・ナショナル日系博物館・
ヘリテージセンター協会理事

生きた教室 海外移住資料館

単なる昔話に終わる歴史にはそれ以上の価値はない。

その昔話から何か習うことによって歴史は生きてきて将来に貢献する。

良き歴史から良き将来を築き、悪い歴史を繰り返さなければ、歴史は将来に貴重な過去となる。

カナダにおける日本人の歴史は1877年にさかのぼり、太平洋を渡った日本人の中では一番古いと思われる。19世紀末から20世紀初頭にかけては、和歌山県から、広島県から、滋賀県から、さらには日本の諸地方から一獲千金の夢を追って、あるいはその人たちに呼び寄せられて、多くの日本人が太平洋を渡ってカナダに到来した。

彼らは苦勞の中から繁栄を生み出し、差別と迫害を乗り越えて多くは千金以上の宝を見つけたのである。それはその大地に根をおろせる国だった。その国は多様人種、ひいては多様文化を奨励する国でありそれぞれのヘリテージが将来を築く一角となる国なのだ。

海外移住資料館は単に太平洋を渡った日本人の歴史を展示しているだけではなく過去を識ることによって良き将来を築く生きた教室です。

篠遠 和子 氏
日本人移民史研究家

米国のペリーによる開国後 1858 年通商条約が締結されたことで、明治維新以前にハワイの元年者、グアムへの日本人移民の渡航はあったとしても、ハワイ政府からの強い要請により明治政府との間で正式な交渉にもとづき砂糖黍農場の労働者として 1885 年から始まった日本人官約移民のハワイ渡航こそは日本政府が海外における日本人の権利を保証した最初の出移民であった。その後 1893 年から政府に代り移民会社が移民の渡航業務を行うようになるまでに約 3 万人がハワイに渡った。1900 年にハワイが米国属領となるという政治的影響下にも他国（中国、ポルトガル、ドイツ等）からの移民に比し最も組織的かつ継続的に行われた日本人移民は 1900 年以前、既に農場労働者の 70% に達し、1920 年にはハワイ総人口中日本人が 42% を占めるに至った。

日本人人口の増加が政治に与える影響を恐れられ、既に初期において選挙権を否定されていたが、更に人口の急増にともなって日本人排斥運動が社会を席卷し、1924 年には日本人移民禁止法の制定を見るに至った。これによりハワイに生まれ米国籍を持つ二世に対してさえも人種の差別は根強かった。

第二次世界大戦の勃発により一世、二世ともに敵性外国人として扱われ、米国籍を持ちながら二世たちは軍籍から排除された。一世たちの名誉を思う彼等の嘆願によりハワイから日本人二世部隊が結成され、米国のため命をかけ勇敢に戦った。当時各種職業に就いて広くハワイの社会を支えていた一般の日本人は米国政府の意図した強制収容を不可能なものとしたのであった。戦争が終わって凱旋した二世部隊を迎えたトルーマン大統領が“君たちは敵との戦いに勝ったばかりでなく偏見にも勝った”という賛辞を贈ったことに表れているように戦後米国人の日本人に対する見方が変わり、二世たちも自信を得たのであった。

19 世紀末から 21 世紀に亘り砂糖産業がもたらしたハワイ経済のめざましい発展は他でもなく農場における白人支配の社会の下積みに甘んじた多くの日本人移民の働きに支えられたものであるということが出来る。

戦後における二世の社会、特に政界への進出により、初めて実力を身に付けた二世によって日本人が従来の支配階級と肩をならべることができた。日本の海外移民のさきがけとしてハワイの歴史の中に見る日本人移民の歴史は移民のケースヒストリーとしても他に例を見ないものと私は信じている。

貴館ではこの度新しい企画展示、教育プログラムを準備中とかがい、ハワイ、米本土、南米を擁したスケールの大きい展示がよりよく理解されるために、現在各セクションにある年表や限られたキャプションの他に各地域毎における移民の経緯、時代（19 世紀後半から 21 世紀前半、戦後移民等）、移民先の国における生活を通じた日本人の歴史についての小冊子を作っていたいただければ一般の日本人および移民先の国からの来館者の理解に役立つのではないかと思われる。以前に提案した地域毎のドーセント（展示解説員）による説明もグループの来館者には適するのかもしれない。

教育プログラムとして時には各地域の移民について一般向けのレクチャーがあってもよいかと思われる。

以上私自身の関係しているハワイの場合によっての遠慮のない私見ながら、他の地域にも敷衍できるのではないかと思うまますのべさせていただきました。

アイリーン・Y・ヒラノ 氏 全米日系人博物館長

カリフォルニア州ロサンゼルスに拠点を置く全米日系人博物館は、横浜の海外移住資料館の展示および事業についてご支援できたことを大変うれしく思います。海外移住資料館は北米および南米における日系人の体験に関する情報提供に関して、すぐれたお仕事をなさってきました。私たちは、JICAが横浜にこの重要な資料館を開設されたご努力を賞賛いたします。私たちは、この資料館が今後日本人々と世界のいろいろな国々にいる日系人との間の相互理解を促進する役割を果たすものと信じております。

アメリカ合衆国は、あらゆる人種と文化を融合した世界で最も多様性に富んだ国であります。日系アメリカ人は、他の移民グループと同様、アメリカの国造りに貢献してきました。1800年代末に始まる初期の一世の先駆者たちから、今日の四世、五世にいたる物語は、教育的かつ人々の心をゆさぶるものがあります。海外移住資料館では、日系人の経験を通してみた南北アメリカの歴史の貴重な俯瞰図を展示しているとも言えます。

全米日系人博物館は、日米の関係というのは将来においても重要な関係として続くことと信じております。私たちは、若い世代の日系アメリカ人が自分たちの祖先と日本について知見を広める機会を与えられるべきであると確信します。また、日本国民が海外移住資料館の展示および各種事業を通じて、アメリカをはじめいろいろな国々に暮らす日系人について学ばれることを希望します。私たちは、このメッセージを契機として、日本国民、とりわけ若い人々がロサンゼルス全米日系人博物館を訪れ、アメリカにおける日系人の足跡をさらに詳しく学ばれることを希望いたします。

全米日系人博物館としては、今後も海外移住資料館と力を合せて事業計画および諸活動を展開したいものと期待しているところです。

(原文英語から和訳)

第Ⅶ章 来館者ノートから

青年ボランティアとしてブラジルの日系社会の中で2年間くらししました。

日本を強く愛し、誇りを持って力強く生きている日系人の皆さんのことを、より多くの人々に知っていただきたいです。

奈良県 E・F さん

私達の知らない事が、まだまだ沢山あるんだなと、とても考えさせられた。日系人のようなきずなを今の若者にも大切にしてもらいたい。

鎌倉市 Y・I さん

約100年前の日本人の勤勉さと苦勞の道のりの上に今日の繁栄があることにあらためて考えさせられました。これからも日本人はいかなる地においても最善をつくすことを確信しました。

移住者の方々のご苦勞に感謝しご多幸を祈りたいと思います。

横浜市 C・A さん

日本人移住者がこんなにも多いこと、収容されていた歴史etc. 今まで全然知らなかったことがたくさんあって驚いた。

様々な人種、文化が混合されていく様子がとても興味深かった。

茨城県 K・T さん

近所の日本語学校の職員ですが、学生たちにも一度足を運んでももらいたいと思いました。移民の人たちの記念の品を見ると、どんな気持ちで海を渡ったのかな、と彼等を非常に身近に感じることができました。

横浜市 Y・T さん

ブラジル移民の一人ですが、アメリカ、アルゼンチン、パラグアイ移民等コンパクトにまとめられ、ことにブラジル移民は40年前の思い出、知人が出てきて、感動的なシーンがありました。

若い人たちにも知って戴き、日伯親善の役に立って頂ければと思っています。

サンパウロ S・M さん

すばらしい展示でした。

移民の方の最近のインタビュービデオや港から移住していった昔の様子を撮ったビデオは特に貴重で生々しかったです。

市内の小・中・高校の子供たちにも多く見学に来てほしいと思いました。

横浜市 M・H さん

わかりやすい資料館でした。

今まで(ブラジルで)知らなかった祖父やその兄弟達の苦勞を少しでも勉強できたのではないかと思います。

よかったです。

東京都 M・F さん(ブラジル出身)

海外移住資料館は2002年10月に開館以来、来館者のご感想、ご意見を記入していただくため、「来館者ノート」を設置しています。これまで約3万人の入館者のうち、約6千人の方々のご意見を残してくださいました。ここに、一部分を掲載させていただきました。

私の両親がブラジルにわたったようすがわかりました。

今、父は87さい、母は85さいでサンパウロに住んでいます。

ありがとうございました。

東京都 E・K さん(ブラジル出身)

苦勞の歴史に涙する思いです。

それでも日本人としての誇りと生活を忘れられなかった努力や、現地に溶け込もうとされた努力に感服します。

日本人というより地球人としての姿に感動します。

東京都 M&K・W さん

日系移住者の方々が、移住先国でも日本の伝統・文化に誇りを持ち、社会を作り、その国と共生している事に、私自身日本人として誇りを持ってたような気がしました。

新しい見方で、違った角度から日本を発見したような気がしました。

茨城県 S・N さん

祖父母が戦前南洋に移民しておりました。

当時の移民した人たちの精神に触れる事ができ現代の私たちもまだまだこれからやれるという力が湧いてきました。

ありがとうございました。

広島県 N・O さん

本当にきれいにできています。

かんどうしました。

ここにおいてあります蓄音機はおじいちゃんのものです。

ペルー M・T さん

日本人移住者がとても多いことに驚きました。

写真で六世までの一族が写っているものがあつたが、一見すると多民族の集まりのように見えるのに、一家族であるということにとっても驚き、このような歴史があることを知れたことが良かった。

茨城県 F・F さん

教科書では学べない事が沢山あつて、新しい発見も有りとてもきょう味深いものでした。

東京都 H&M・A さん

まことに感銘深く拝見しました。

もっと若い人たちが見て下さることを希望します。

日本人としての心構えと誇りを持つために！

横浜市 T&S・S さん

移民の勇氣と努力に感動しました。困難を乗り越える勇氣を与えられた気がいたします。我が日本人は立派ですね。

東京都 A・Mさん

先駆者のご苦勞が偲ばれました。

また、ご苦勞の中にも、日本人としての心を持ち続け、次の世代に受け継がれたことに感銘いたしました。

横浜市 Y・T さん

掲載資料等の著作権所有者・機関一覧

機関・個人名	掲載資料番号
株式会社商船三井	3. 50.
外務省外交史料館	8. 9. 13. 14. 17.
同志社大学アメリカ研究科アメリカ研究所	23.
広島市市民局文化スポーツ部文化担当	25.
広島県立文書館	38.
国立国会図書館	37. 39.
横浜開港資料館	45.
Oregon Historical Society (オレゴン歴史協会)	2. 75 (3点) . 92. 110.
Bishop Museum (ビショップ博物館)	10. 90. 91. 103.
Charles E.Young Research Library, UCLA (カリフォルニア大学ロサンゼルス校チャールズ・ヤング総合図書館)	27. 71. 82.
Peabody Essex Museum (ピーボディ博物館/ユニフォトプレス)	30.
National Maritime Museum (イギリス国立海事博物館)	31.
Davey and the Hawaii State Archives (ハワイ州立古文書館)	52.
Asociacion Colombo Japonesa (コロンビア日本人会)	69.
Museo Commemorativo de la Inmigración Japonesa en e1 Perú 3点とも出典：La Memoria del Ojo (Jose Watanabe, Amelia Morimoto, Oscar Chambi) (ペルー日本人移住史料館)	70. 85. 111 (Alberto Nabeta) .
Museu Histórico da Imigração Japonesa no Brasil (ブラジル日本移民史料館)	72.
Museu Histórico da Imigração Japonesa do Paraná (パラナ州日本移民史料館)	78.
Fresno County Free Library (フレズノ州立図書館)	83.
Associação Cultural de Tomé - Açú (トメアスー文化協会)	88.
University of Washington Libraries (ワシントン大学図書館)	95.
Kuakini Health System (クアキニヘルスシステム)	104.
阪田 安雄	18 (深豊幸) . 20. 42.
野上 隼人	32.
藤居 一郎	43. 44.
山田 勉生	51.
半田 知雄	67.
Homer Yasui	74.
小林 恵寿	79.
清水 道子	102.
Kimiko (Saito) Nasu	106.
Barbara F. Kawakami 出典：Barbara Kawakami, -collection, Japanese Immigrant Clothing in Hawaii, 1855-1941. p.177 (バーバラ 川上)	109.
Familia Takaichi, Silvia Ogura (高市家)	112.

個人 敬称略

利用案内



開館時間： 10:00 ～ 18:00 (入館は17:30まで)

休館日： 月曜日 (月曜日が祝祭日の場合は翌日)
年末年始 (12月29日から1月3日)

入館料： 無料

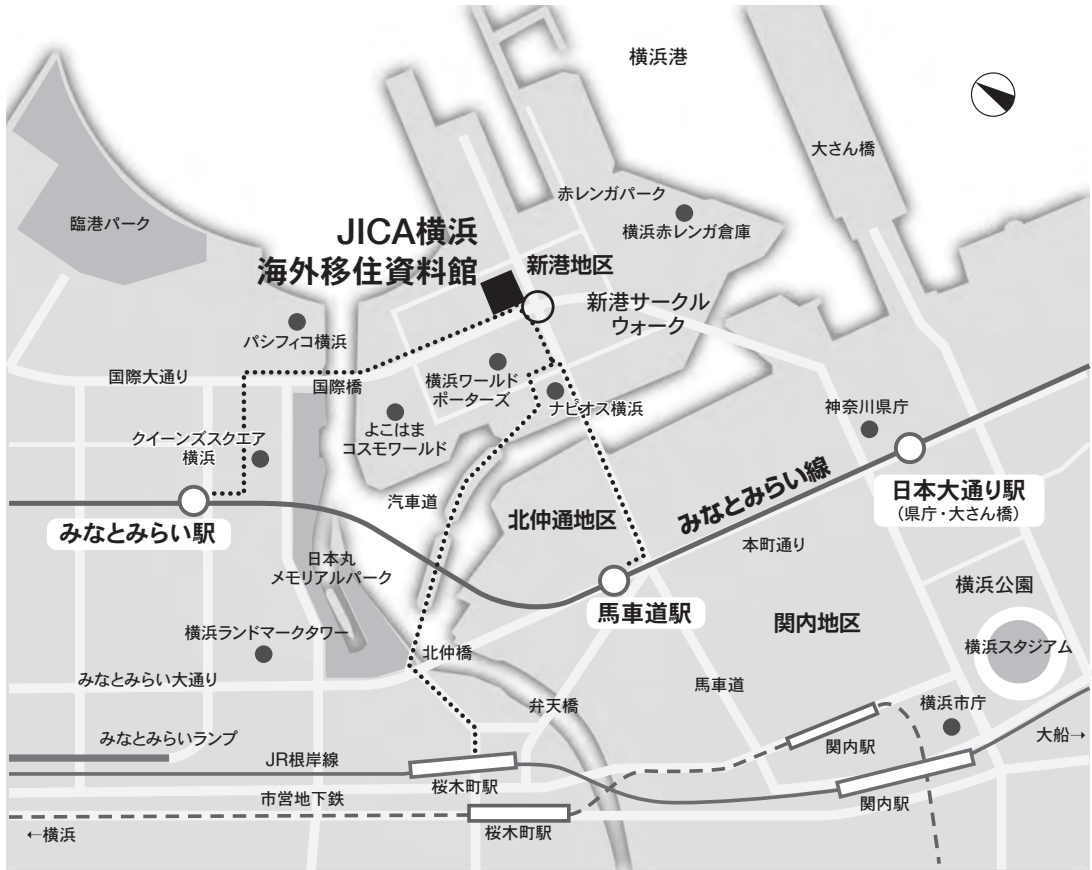
団体入館： 当日の入館可能です
展示場の案内・解説を希望される場合、20名以上で入館される場合は事前にお申し込みくださるようお願いいたします

写真撮影： 他の入館者の迷惑にならないよう配慮していただき、スナップ写真、記念写真の撮影は指定した場所のみ可能です

その他： コインロッカー、車椅子の使用可能です
レストラン (3F) をご利用いただけます

問合せ先： 電話 045-663-3257 FAX 045-211-1781
URL : <https://www.jica.go.jp/jomm>

交通案内



交通案内

【電車の場合】

- JR・市営地下鉄桜木町駅から汽車道、ワールドポーターズ、新港サークルウォークを通り徒歩15分
- JR・市営地下鉄関内駅から馬車道経由で徒歩15分
- みなとみらい線馬車道駅からワールドポーターズ方向に徒歩8分

【バスの場合】

- 桜木町駅から市営バス「あかいくつバス」で10分、ワールドポーターズ下車、サークルウォークを通り徒歩3分
- 横浜駅東口から市営バス「ぶらり赤レンガBUS」で15分、ワールドポーターズ下車、サークルウォークを通り徒歩3分(土休日のみ運行)

〒231-0001 神奈川県横浜市中区新港2丁目3番1号
TEL: 045-663-3257 FAX: 045-211-1781

展示案内執筆者

阪田 安雄

海外移住資料館展示監修者・大阪学院大学名誉教授

中牧 弘允

海外移住資料館展示監修者・国立民族学博物館名誉教授

山本 匡

海外移住資料館展示監修者

小嶋 茂

海外移住資料館研究員

福田 直毅

上智大学講師（元海外移住資料館研究員）

城田 愛

大分県立芸術文化短期大学教員（元海外移住資料館研究員）

海外移住資料館 展示案内
われら新世界に参加す

企画・編集：海外移住資料館

発行：独立行政法人国際協力機構 横浜国際センター

231-0001 横浜市中区新港2丁目3番1号

TEL：045-663-3257

FAX：045-211-1781

<https://www.jica.go.jp/jomm>



独立行政法人 国際協力機構